

(3) 抵抗・非理解回答への対応

1) 微小な死亡リスクを削減する対象財(安全グッズ)

既存調査における微小な死亡リスク削減に対する支払意思額(確率 CV 法)の設問に関する抵抗・非理解回答率は表 4-16 のとおりである。選択肢の見直し、マルチアンサーからシングルアンサーへの変更などの対応により抵抗・非理解回答率は改善されてきているものの、平成 28 年度本調査においても約 34%を占めている。

表 4-16 既存調査における有効回答と抵抗・非理解回答の比率(安全グッズ)

	回答者数(人)			比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
平成 28 年度本調査	1,489	751	2,240	66.5	33.5
平成 28 年度プレ調査	1,618	942	2,560	63.2	36.8
平成 27 年度調査	843	1,077	1,920	43.9	56.1
平成 23 年度調査	625	375	1,000	62.5	37.5

個別の選択肢の選択結果を概観すると、特に、抵抗回答の「『安全グッズ』に本当に効果があるとはどうしても思えないから」の理由が多くの割合を占めている(図 4-14)。

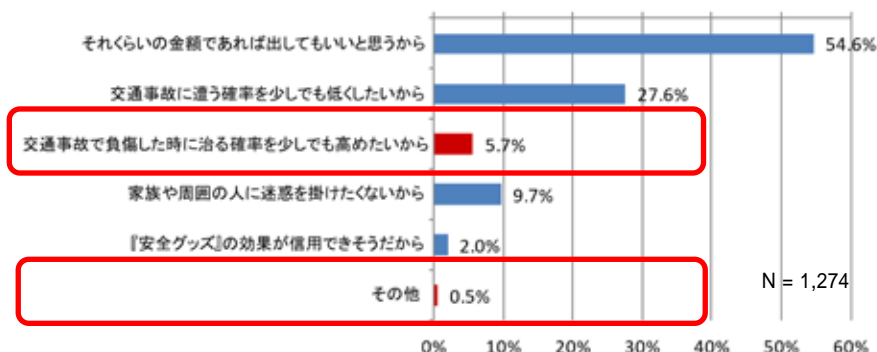
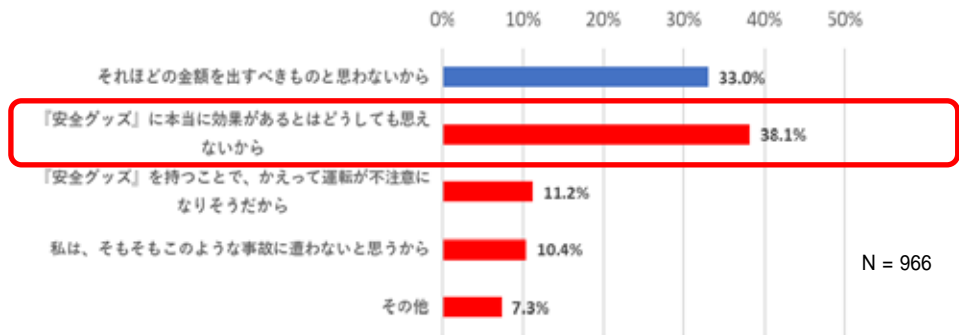


図 4-13 『安全グッズ』に対して使用料を支払う理由の割合(平成 28 年度本調査)

注) 赤色が非理解回答



図s 4-14 「安全グッズ」に対して使用料を支払わない理由の割合(平成28年度本調査)
注)赤色が抵抗回答

2) 特別な治療

「安全グッズ」と同様、平成28年度本調査の負傷状況における「特別な治療」に対する支払意思額の設問についても表s 4-17のとおり、抵抗・非理解回答率が多い。

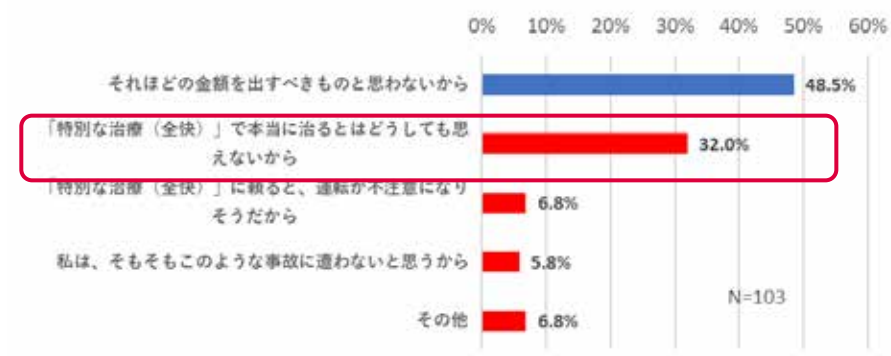
表s 4-17 平成28年度本調査における有効回答と抵抗・非理解回答の比率

	回答者数(人)			比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
負傷Y	240	80	320	75.0	25.0
負傷O	232	88	320	72.5	27.5
負傷A	248	72	320	77.5	22.5
計	720	240	960	75.0	25.0

今回のプレ調査で確定CV法を適用する負傷Aの抵抗・非理解回答の状況(平成28年度調査)を概観すると、特に抵抗回答の「特別な治療(全快)」で本当に治るとはどうしても思えないから」が他の理由に比べて多くなっている。



図s 4-15 「特別な治療」に対して治療費を支払う理由の割合(平成28年度本調査)
注)赤色が非理解回答

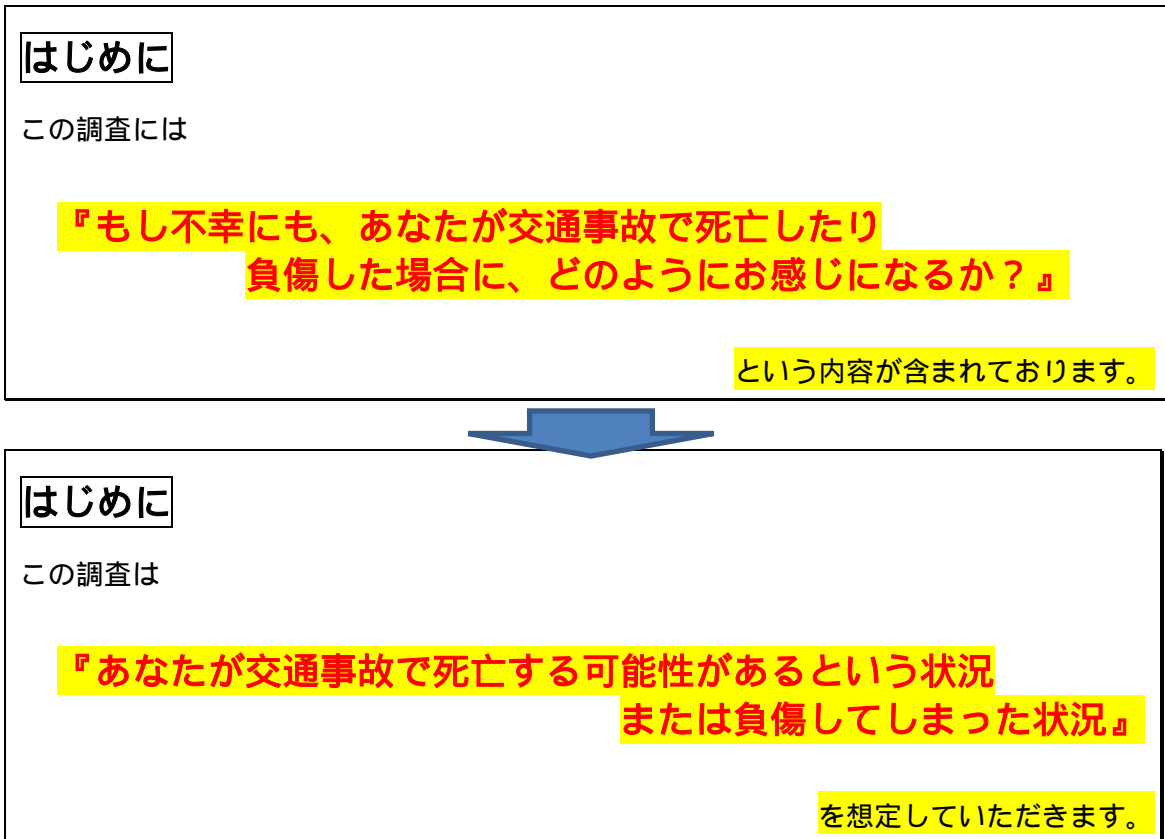


図s 4-16 「特別な治療」を受けない理由の割合(平成 28 年度本調査)
 注)赤色が抵抗回答

(4) アンケート説明文の表現変更

1) 「アンケートを回答する際の状況想定説明文の表現変更

アンケートを回答する際の状況想定が、あたかも確実に死亡または負傷する表現となっているため、適切な表現に変更する。



図s 4-17 「アンケートを回答する際の状況想定」(前)の変更前(上)と変更後(下)

アンケートにお答えいただくにあたって

この調査では、まずはじめに、

もし不幸にも、あなたが交通事故で死亡するような状況

を想定した質問にお答えいただきます。
質問に先立って、・・・・・・・・

アンケートにお答えいただくにあたって

この調査では、

あなたが交通事故で死亡する可能性があるという状況

を想定した質問にお答えいただきます。
質問に先立って、・・・・・・・・

図s 4-18 「アンケートを回答する際の状況想定」(後)の変更前(上)と変更後(下)

2) 「特別な治療」の説明文の表現変更

最近の AI や VR を使用した高度な医療技術が実装されているため、「特別な治療」の説明文について、実商材をイメージしづらい表現に変更する。

特別な治療について

交通事故に遭い、負傷してしまった時、あなたは「普通の処置」のみを受けるか、それとも、**現在研究が進められている最先端の医療技術**を使った「特別な治療」を受けるかを、選択することができます。

特別な治療について

交通事故に遭い、負傷してしまった時、あなたは「普通の処置」のみを受けるか、それとも、**まだ開発されていない画期的な医療技術**を使った「特別な治療」を受けるかを、選択することができます。

図s 4-19 「アンケートを回答する際の状況想定」の変更前(上)と変更後(下)

s 4.2.3 プレアンケート調査の設問内容の設定

(1) 微小な死亡リスクの削減に対する支払意思額の設問(確率 CV 法)

1) ダブルバウンド方式による提示金額の組合せパターン

微小な死亡リスクの削減に対する支払意思額の設問は、既存調査(内閣府)と同様、二段階二項選択(ダブルバウンド)方式の確率 CV 法で尋ねる。また、支払意思額を回答する前に、「死亡リスクが 20%削減される場合」と「50%削減される場合」の対象財があることを提示した上で、「そのうちあなたには %削減の場合を想定してお答えいただきます」という前提をおき、死亡リスク削減率には幅があることを提示する。

また、ダブルバウンド方式の提示金額の組合せパターンは、平成 28 年度調査と同様とし、いずれも均等の出現率となるよう、無作為に組合せを割り付けた。微小な死亡リスクの削減に対する支払意思額に関する提示額は表 s 4-18 のとおりとした。

表 s 4-18 ダブルバウンド方式による提示金額の組合せパターン(確率 CV 法)

金額の組合せ	T1 ¹	TU ²	TL ³
金額組合せ 1	千	5 千	百
金額組合せ 2	5 千	1 万	千
金額組合せ 3	1 万	3 万	5 千
金額組合せ 4	3 万	5 万	1 万
金額組合せ 5	5 万	10 万	3 万

1: 最初の提示額

2: 最初の提示額を肯定した場合に、次に提示する額

3: 最初の提示額を否定した場合に、次に提示する額

2) 抵抗・非理解回答の設問

微小な死亡リスクの削減に対する支払意思額の回答後、設問における状況設定の理解度および抵抗回答(評価対象に対して真の支払意思額を持っているが、違う評価対象に対する金額の回答や支払い方法が嫌なので支払わない等といった、評価対象に対する評価を適切に表明していない回答)を確認するための設問を設定する。選択肢は、平成 28 年度調査と同様である。

表s 4-19 1回でも使用したいと回答した回答者の理由(選択肢)と有効/非理解回答

選択肢	有効/非理解回答
それくらいの金額であれば出してもいいと思うから	有効回答
交通事故に遭う確率を少しでも低くしたいから	有効回答
交通事故で負傷した時に治る確率を少しでも高めたいから	非理解回答
家族や周囲の人に迷惑を掛けたくないから	有効回答
『安全グッズ』の効果が信用できそうだから	有効回答
その他(自由記述)	非理解回答

表s 4-20 2回とも使用したくないと回答した回答者の理由(選択肢)と有効/抵抗回答

選択肢	有効/抵抗回答
それほどの金額を出すべきものと思わないから	有効回答
『安全グッズ』に本当に効果があるとはどうしても思えないから	抵抗回答
『安全グッズ』を持つことで、かえって運転が不注意になりそうだから	抵抗回答
私は、そもそもこのような事故に遭わないと思うから	抵抗回答
その他(自由記述)	抵抗回答

(2) 負傷状態における「特別な治療」に関する設問(SG法)

1) SG法の設問表

SG法において提示する負傷状態の下の「特別な治療」の成功・失敗確率の選択肢は、平成28年度調査と同様、以下に示す15区分の多段階二項方式とし、「特別な治療」の成功確率の低い方から並べる。

表s 4-21 負傷状態における「特別な治療」を受けてもよい/受けたくないの設問表

	どちらか一方を選択	
	受けてもよい	受けたくない
成功確率が0.1%(失敗確率99.9%)なら、特別な治療を		
成功確率が1%(失敗確率99%)なら、特別な治療を		
成功確率が5%(失敗確率95%)なら、特別な治療を		
成功確率が10%(失敗確率90%)なら、特別な治療を		
成功確率が20%(失敗確率80%)なら、特別な治療を		
成功確率が30%(失敗確率70%)なら、特別な治療を		
成功確率が40%(失敗確率60%)なら、特別な治療を		
成功確率が50%(失敗確率50%)なら、特別な治療を		
成功確率が60%(失敗確率40%)なら、特別な治療を		
成功確率が70%(失敗確率30%)なら、特別な治療を		
成功確率が80%(失敗確率20%)なら、特別な治療を		
成功確率が90%(失敗確率10%)なら、特別な治療を		
成功確率が95%(失敗確率5%)なら、特別な治療を		
成功確率が99%(失敗確率1%)なら、特別な治療を		
成功確率が99.9%(失敗確率0.1%)なら、特別な治療を		

ここで、回答者の選択結果より、成功確率 p は以下のとおり設定する。

- l 「受けてもよい」成功確率の最も低い確率を、当該回答者の選択した成功確率 p と設定
- l すべての成功確率で「受けたくない」を選択した場合、成功確率は99.99%と設定(100%としない)。
- l すべての成功確率で「受けてもよい」を選択した場合、成功確率は0.1%と設定。

また、死亡と提示した負傷状態との代替率は、ランキング法により、

- l 「死亡するより、提示した負傷状態がマシ(望ましい)」である場合は、成功確率 $p\%$ ($0.1 \leq p \leq 99.99$)とすると、代替率は、 $(100 - p)[\%]$ 、
- l 「提示した負傷状態より、死亡する方がマシ(望ましい)」である場合は、成功確率 $p\%$

(0.1 p 99.99)とすると、代替率は、 $(100 \div (100 - p) \times 100)$ [%]、と定義する。

2) 非理解回答の設問

SG 法についても、「特別な治療」の内容の理解度を確認するための設問を設定する。具体的には、「今回の質問で、前提として設定した「特別な治療」といったものは、当然ながら現実には存在しません。あくまで「もしそのようなものが本当にあったとしたら」という仮定の上での質問であることは理解できましたか。」という質問に対して、表s 4-22 の「仮定であることは十分に理解して回答していると思う」と「一部納得はしていないが、ある程度理解して回答していると思う」を選択した回答を有効回答とした。

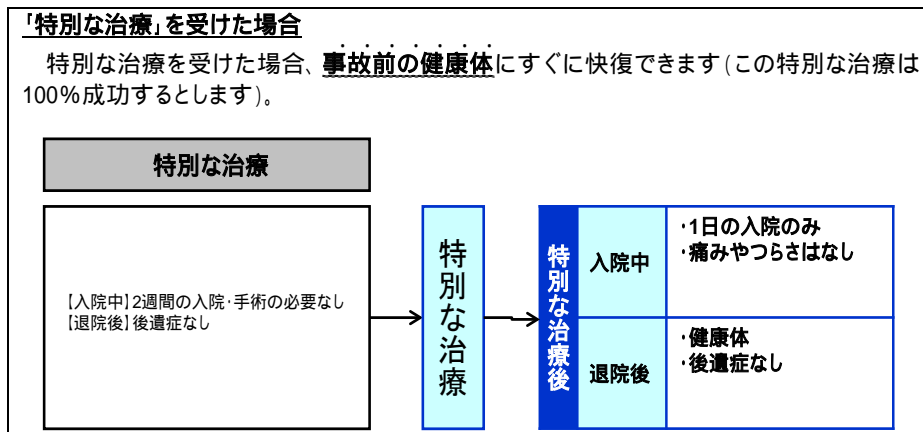
表s 4-22 SG 法に適用する「特別な治療」の有効回答/非理解回答

選択肢	有効/非理解回答
仮定であることは十分に理解して回答していると思う	有効回答
一部納得はしていないが、ある程度理解して回答していると思う	有効回答
よく理解していないが、なんとなく回答した	非理解回答
そのような仮定は納得できない	非理解回答

(3) 負傷状態(負傷 A)における「特別な治療」に関する設問(確定 CV 法)

1) 確定 CV 法の概説

確定 CV 法は、負傷 A の設問に適用する手法である。具体的には、回答者に対して、あなたが交通事故に遭い、ある負傷状態になったとき、確実に事故前の健康体に快復し、すぐに退院できる「特別な治療」を受けるための支払意思額をダブルバウンド方式により把握するものである。



図s 4-20 確定 CV 法の設問構造(負傷 A の例)

2) ダブルバウンド方式による提示額の組合せパターン

微小な死亡リスクの削減による支払意思額と同様、ダブルバウンド方式の提示金額の組合せパターンは、平成 28 年度調査と同様とし、いずれも均等の出現率となるよう、無作為に組合せを割り付ける。

表s 4-23 ダブルバウンド方式による提示金額の組合せパターン(確定 CV 法)

金額の組合せ	T1 ¹	TU ²	TL ³
金額組合せ1	3万	5万	1万
金額組合せ2	5万	10万	3万
金額組合せ3	50万	100万	30万
金額組合せ4	100万	300万	50万
金額組合せ5	300万	500万	100万

- 1: 最初の提示額
- 2: 最初の提示額を肯定した場合に、次に提示する額
- 3: 最初の提示額を否定した場合に、次に提示する額

3) 抵抗・非理解回答の設問

確定CV法についても、設問における状況設定の理解度および抵抗回答(評価対象に対して真の支払意思額を持っているが、違う評価対象に対する金額を回答したり、提示された状況や支払い方法に納得ができないため支払わない等といった、評価対象に対する評価を適切に表明していない回答)を確認するための設問を設定する。選択肢は、平成28年度調査と同様である。

表s 4-24 1回でも使用したいと回答した回答者の理由(選択肢)と有効/非理解回答

選択肢	有効/非理解回答
それくらいの金額であれば出してもいいと思うから	有効回答
交通事故に遭う確率を少しでも低くしたいから	有効回答
交通事故で負傷したけがを治したいから	非理解回答
家族や周囲の人に迷惑を掛けたくないから	有効回答
その他(自由記述)	非理解回答

表s 4-25 2回とも使用したくないと回答した回答者の理由(選択肢)と有効/抵抗回答

選択肢	有効/抵抗回答
それ程の金額を出すべきものと思わないから	有効回答
「特別な治療(全快)」で本当に治るとはどうしても思えないから	抵抗回答
「特別な治療(全快)」に頼ると、運転が不注意になりそうだから	抵抗回答
私は、そもそもこのような事故に遭わないと思うから	抵抗回答
その他(自由記述)	抵抗回答

s 4.3 プレアンケート調査の結果と本調査に向けた課題の整理

s 4.3.1 一人当たり死亡損失(確率 CV 法)に関する分析結果

(1) 回答者比率

1) 性別・年齢階層別回答者数および比率

死亡リスク削減率(20%、50%)ごとの回答者数は、ほぼ同数となり、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。また、回答者の年齢階層別構成比についても、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。

表s 4-26 死亡リスク削減率(20%、50%)別性別回答者比率

死亡リスク削減率	回答者数(人)				構成比(%)		
	男性	女性	答えたくない	総計	男性	女性	答えたくない
20%	760	840	7	1,607	47.3	52.3	0.4
50%	780	820	6	1,606	48.6	51.1	0.4
合計	1,540	1,660	13	3,213	47.9	51.7	0.4
全国(千人) ⁴⁸	61,019	64,483	-	125,502	48.6	51.4	-

表s 4-27 死亡リスク削減率(20%、50%)別年齢階層別比率

	リスク削減率	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
回答者数(人)	20%	198	201	272	265	671	1,607
	50%	196	235	278	257	640	1,606
	合計	394	436	550	522	1,311	3,213
比率(%)	20%	12.3	12.5	16.9	16.5	41.8	100.0
	50%	12.2	14.6	17.3	16.0	39.9	100.0
	合計	12.3	13.6	17.1	16.2	40.8	100.0
全国(千人)		12,643	13,909	17,903	17,077	43,604	105,136
全国比率(%)		12.0	13.2	17.0	16.2	41.5	100.0

⁴⁸ 令和3年10月1日現在。人数の単位は千人。以下同様。

2) 抵抗・非理解回答比率

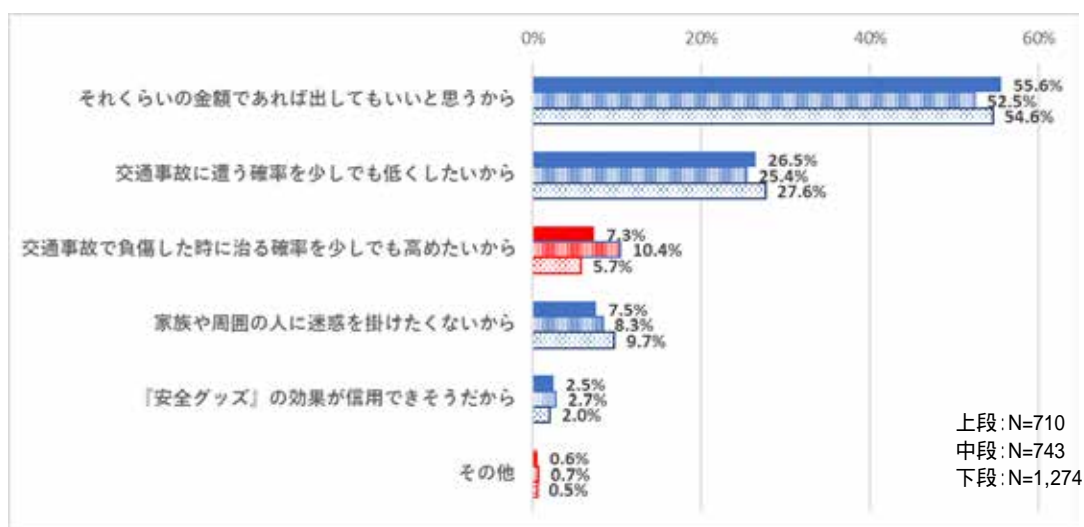
交通事故により微小な死亡リスク変化に対する支払意思額に関する設問について、「安全グッズ」に関する抵抗・非理解回答の比率は、平成 28 年度本調査と比較して、6 ポイント程度増加した。

表s 4-28 負傷損失の方法別比較

死亡リスク削減率	サンプル数(人)			有効及び抵抗・非理解回答比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	合計	有効回答	抵抗・非理解回答
20%	969	638	1,607	60.3	39.7
50%	966	640	1,606	60.1	39.9
合計	1,935	1,278	3,213	60.2	39.8
<参考> 平成 28 調査(50%)	1,489	751	2,240	66.5	33.5

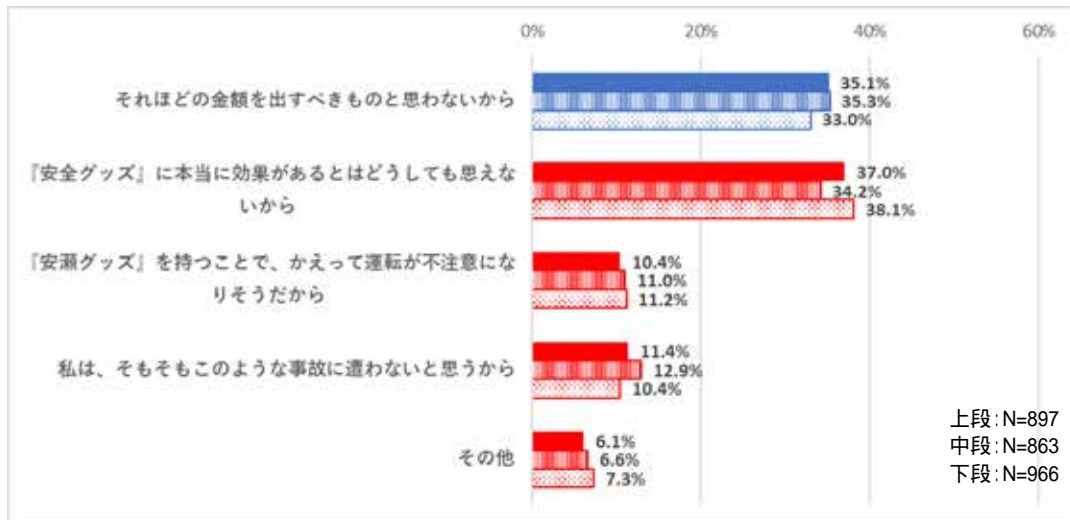
『安全グッズ』に対する理解度、抵抗回答に関する設問の選択肢を個別にみていくと、支払う意思を示した回答者の理由として、非理解に該当する選択肢(交通事故で負傷した時に治る確率を少しでも高めたいから)の割合は、平成 28 年度調査と比較して増加している。

また、『安全グッズ』の使用料を支払う意思のない回答者のうち抵抗回答を選択した割合は、平成 28 年度調査と比較して、一部を除いて概ね減少傾向が見られる。



注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

図s 4-21 『安全グッズ』の使用料を支払う意思を示した理由
(上段: プレ調査(20%)、中段: プレ調査(50%)、下段: H28 本調査(50%))



注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-22 『安全グッズ』の使用料を支払う意思のない理由
(上段: プレ調査(20%)、中段: プレ調査(50%)、下段: H28 本調査(50%))

(2) 死亡損失(確率 CV 法)における一人当たり死亡損失の試算

1) 支払意思額の推定方法

微小な死亡リスク削減による支払意思額及び一人当たり死亡損失の推定は、対数ロジットモデル(ダブルバウンド)により行った。

モデル式の被説明変数には、提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率 $Pr[Yes]$ を採用し、 $Pr[Yes]$ は定数項 a と提示額 Bid の対数値 $\ln(Bid)$ とその係数 b 及び誤差項によって決定されると仮定し、係数は最尤推定法にて行った。推計は栗山浩一氏作成の「Excel でできる CVM Ver.4.0」を用いた。

$$Pr[Yes] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(Bid)$$

ここで、 $Pr[Yes]$: 提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率

V : 効用レベル

Bid : 提示額【使用料】(円)

a, b : パラメータ

モデルのパラメータ推定に適用したサンプルについて、『安全グッズ』の使用料に関する最初の提示額と2回目の提示額への賛成/反対のパターンをYY(1回目の提示額も2回目の提示額も賛成)、YN(1回目の提示額は賛成するが2回目の提示額には反対)、NY(1回目の提示額には反対したが2回目の提示額には賛成)、NNの4パターン(1回目の提示額も2回目の提示額も反対)とし、金額組合せ(5パターン)毎に、賛成/反対の回答者数を集計した。

死亡リスク削減率 20%のケースでは、全サンプル 1,607 サンプル、有効回答サンプルは 969 サンプルとなった。死亡リスク削減率 50%のケースでは、全サンプル 1,606 サンプル、有効回答サンプルは 966 サンプルとなった。

表s 4-29 金額組合せパターン

	T1(円)	TU(円)	TL(円)
金額組合せ 1	1,000	5,000	100
金額組合せ 2	5,000	10,000	1,000
金額組合せ 3	10,000	30,000	5,000
金額組合せ 4	30,000	50,000	10,000
金額組合せ 5	50,000	100,000	30,000

表s 4-30 提示金額別賛成/反対サンプル数
(全サンプル:死亡リスク削減率 20%)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	76	81	91	72	320
5,000	10,000	1,000	49	53	82	138	322
10,000	30,000	5,000	35	37	48	202	322
30,000	50,000	10,000	22	19	53	228	322
50,000	100,000	30,000	21	30	13	257	321
合計			203	220	287	897	1,607

表s 4-31 提示金額別賛成/反対サンプル数
(有効回答サンプル:死亡リスク削減率 20%)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	72	73	88	20	253
5,000	10,000	1,000	43	49	79	37	208
10,000	30,000	5,000	30	35	47	67	179
30,000	50,000	10,000	20	18	48	78	164
50,000	100,000	30,000	17	25	10	113	165
合計			182	200	272	315	969

表s 4-32 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(全サンプル:死亡リスク削減率 50%)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	62	93	71	94	320
5,000	10,000	1,000	72	46	82	123	323
10,000	30,000	5,000	39	44	39	200	322
30,000	50,000	10,000	43	32	48	197	320
50,000	100,000	30,000	14	37	21	249	321
合計			230	252	261	863	1,606

表s 4-33 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(有効回答サンプル:死亡リスク削減率 50%)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	52	79	70	24	225
5,000	10,000	1,000	65	42	77	38	222
10,000	30,000	5,000	37	36	35	68	176
30,000	50,000	10,000	38	26	45	76	185
50,000	100,000	30,000	9	31	19	99	158
合計			201	214	246	305	966

パラメータ推定の結果を下表に示す。いずれのケースにおいても、パラメータは 1%有意となっており、支払意思額は中央値で 1,579 円 ~ 5,151 円、平均値で 13,048 円 ~ 20,359 円となった。

表s 4-34 ロジットモデルパラメータ及び推計結果 (死亡リスク削減率 20%)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	4.8178	25.035	0.000***	6.8410	24.658	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.6542	-28.166	0.000***	-0.8169	-25.778	0.000***
対数尤度	-1770.282			-1286.113		
サンプル数	1,607			969		
中央値(円)	1,579			4,334		
平均値(円) ²	13,048			17,245		

1: *** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2: 平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

表s 4-35 ロジットモデルパラメータ及び推計結果(死亡リスク削減率 50%)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	4.4345	25.243	0.000***	6.4994	24.128	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.5933	-28.022	0.000***	-0.7604	-25.000	0.000***
対数尤度	-1892.662			-1332.640		
サンプル数	1,606			966		
中央値(円)	1,762			5,151		
平均値(円) ²	15,668			20,359		

1: *** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2: 平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

2) 一人当たり死亡損失の算定における死亡リスク削減率の有意差の推定方法

プレアンケート調査では、死亡リスク削減率として20%、50%のケースを設定し、回答者にはいずれか一方のみを尋ねているが、両者に有意差があるかを、以下のモデルにて検証した。対象サンプルからは、抵抗・非理解回答を除去したものをを用いた。

モデル式の被説明変数には、提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率 $\text{Pr}[\text{Yes}]$ 、とし、 $\text{Pr}[\text{Yes}]$ は定数項 a と提示額 Bid の対数值 $\ln(Bid)$ とその係数 b 及び誤差項によって決定されると仮定し、ダミー変数 $Risk$ は、死亡リスク削減率50%で尋ねた場合に1、20%で尋ねた場合に0となる変数とし、係数は最尤推定法にて推定した。

$$\text{Pr}[\text{Yes}] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(Bid) + c \cdot Risk$$

パラメータ推定結果を下表に示す。 $Risk$ にかかる係数は10%有意水準で有意となっており、またダミー変数 $Risk$ の符号条件も正であり整合的であることから、死亡リスク削減率20%と50%で10%の有意水準で差があることが確認できた。

表s 4-36 死亡リスク削減率の違いによる有意差検証モデルのパラメータ推定結果

	有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値
定数項	6.5899	33.377	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.7879	-35.894	0.000***
$Risk$	0.1519	1.764	0.078*
対数尤度	-2619.6285		
サンプル数	1,935		

:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

(3) 「安全グッズ」に関する解説画面読み時間分布

Web アンケートの画面上には、死亡リスクを削減する「安全グッズ」に関する解説画面が表示されているが、その説明文を読んでいるかどうかを確認するために、回答に移るまでの時間を計測した。

その結果、約 75%の回答者が 1 分以内に、約 93%の回答者が 2 分以内に説明文を読み終えて、次の画面に移行している。平成 28 年度調査では、約半数の回答者が 15 秒以内に説明文を読み終えていることを踏まえ、今回のプレ調査では、「安全グッズ」を十分に理解してもらうために、説明文を追記したり、文字を強調したり様々な工夫をしたことが効果的であったといえる。

表s 4-37 『安全グッズ』の解説画面読み時間分布

	0~1 分	1~2 分	2~3 分	3~4 分	4~5 分	5~6 分	6~7 分	7~8 分	8~9 分	9~10 分	10分~	合計
回答者数(人)	2,400	574	85	31	15	10	7	8	3	4	76	3,213
比率(%)	74.7	17.9	2.6	1.0	0.5	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1	2.4	100.0
累積比率(%)	74.7	92.6	95.2	96.2	96.6	96.9	97.2	97.4	97.5	97.6	100	100.0
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	83.6	97.1	98.7	99.0	99.2	99.2	99.2	99.3	99.4	99.5	100	100.0

	0~5 秒	5~10 秒	10~ 15秒	15~ 20秒	20~ 25秒	25~ 30秒	30~ 35秒	35~ 40秒	40~ 45秒	45~ 50秒	50~ 55秒	55~ 60秒	小計
回答者数(人)	12	5	385	485	344	258	200	154	166	143	130	118	2,400
比率(%)	0.4	0.2	12.0	15.1	10.7	8.0	6.2	4.8	5.2	4.5	4.0	3.7	74.7
累積比率(%)	0.4	0.5	12.5	27.6	38.3	46.3	52.6	57.4	62.5	67.0	71.0	74.7	74.7
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	19.3	42.2	50.1	54.6	58.1	61.7	65.1	69.1	72.6	76.2	80.3	83.6	83.6

s 4.3.2 ランキング法の分析結果

負傷区分の中で負傷 Q では、回答者の 11.8%が最も低い順位をつけていたが、それ以外の負傷区分では、負傷 A は 2.3%、それ以外は 2%以下となっていた。

また、死亡より順位が低い死亡区分としては、負傷 Q で、15.3%と最も多く、負傷の程度が低くなるほど、その比率は小さくなっている。

表 s 4-38 負傷区分別順位別回答比率(プレ調査)

順位	K(死亡)	負傷 Q	負傷 E	負傷 Y	負傷 O	負傷 S	負傷 A	J(健康)
1	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
2	3.3%	5.2%	2.0%	1.3%	2.0%	6.3%	79.9%	0.0%
3	1.5%	4.5%	6.6%	3.1%	2.7%	75.4%	6.2%	0.0%
4	1.8%	2.2%	6.3%	8.8%	71.2%	6.6%	3.1%	0.0%
5	2.6%	2.9%	4.9%	73.4%	9.7%	3.6%	2.9%	0.0%
6	4.6%	4.8%	68.7%	9.0%	6.1%	4.0%	2.7%	0.0%
7	5.1%	68.6%	10.5%	3.1%	6.3%	3.5%	2.9%	0.0%
8	81.0%	11.8%	1.1%	1.3%	1.9%	0.6%	2.3%	0.0%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 s 4-39 死亡より順位が低い件数(プレ調査)

順位	負傷 Q	負傷 E	負傷 Y	負傷 O	負傷 S	負傷 A
件数	526	403	294	255	189	162
比率	16.4%	12.5%	9.2%	7.9%	5.9%	5.0%

また、7枚の負傷カードをランキングする時間を測定したが、1分以内が全回答者の41.2%、2分以内が76.2%となっており、平成28年度本調査と比較してランキングの所要時間は短くなっており、負傷の状態などが書かれている負傷カードをしっかりと読んでいない回答者が多かったものと推察される。

表 s 4-40 7枚の負傷カードのランキングにかかった所要時間分布(プレ調査)

	~1分	1~2分	2~3分	3~4分	4~5分	5~6分	6~7分	7~8分	8~9分	9~10分	10分~	計
サンプル数(人)	1,324	1,125	395	129	78	28	18	12	10	4	90	3,213
比率(%)	41.2	35.0	12.3	4.0	2.4	0.9	0.6	0.4	0.3	0.1	2.0	100.0
累積比率(%)	41.2	76.2	88.5	92.5	95.0	95.8	96.4	96.8	97.1	97.2	100.0	100.0
<参考>H28本調査 累積比率(%)	10.0	39.2	63.6	79.2	87.3	91.9	94.5	96.1	96.9	97.5	100.0	100.0

s 4.3.3 負傷損失(SG法)に関する分析結果【負傷 Y、O、S、A】

(1) 回答者比率

1) 負傷区分別性別年齢階層別回答者数及び比率

負傷区分別性別の回答者数を以下に示す。いずれの負傷区分においても同程度のサンプルが得られており、男女比率についても、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。

表s 4-41 負傷区分別性別回答者数及び構成比(プレ調査)

負傷区分	回答者数(人)				構成比(%)		
	男性	女性	答えたくない	合計	男性	女性	答えたくない
負傷 Y	295	345	2	642	46.0	53.7	0.3
負傷 O	313	327	3	643	48.7	50.9	0.5
負傷 S	294	346	2	642	45.8	53.9	0.3
負傷 A	307	333	4	644	47.7	51.7	0.6
合計	1,209	1,351	11	2,571	47.0	52.5	0.4
全国(千人) ⁴⁹	61,019	64,483	-	125,502	48.6	51.4	-

表s 4-42 負傷区分別年齢階層別回答者数および構成比(プレ調査)

	負傷区分	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
回答者数 (人)	負傷 Y	71	82	109	108	272	642
	負傷 O	79	77	109	86	292	643
	負傷 S	84	90	114	99	255	642
	負傷 A	69	96	106	117	256	644
	合計	303	345	438	410	1,075	2,571
構成比 (%)	負傷 Y	11.1	12.8	17.0	16.8	42.4	100.0
	負傷 O	12.3	12.0	17.0	13.4	45.4	100.0
	負傷 S	13.1	14.0	17.8	15.4	39.7	100.0
	負傷 A	10.7	14.9	16.5	18.2	39.8	100.0
	合計	11.8	13.4	17.0	15.9	41.8	100.0
全国(千人)	12,643	13,909	17,903	17,077	43,604	105,136	
全国比率(%)	12.0	13.2	17.0	16.2	41.5	100.0	

構成比、全国比率は、四捨五入しているため、合計の 100.0%と合わないことがある。

⁴⁹ 令和3年10月1日現在(人口推計)：総務省統計局。人数の単位は千人。

2) 負傷区分別にみた死亡よりも望ましくない(WTD)と回答した者の割合

SG 法では、死亡と提示した負傷区分とを比較し、どちらがよりマシな(望ましい)状態であるかによって、SG 法の設問方法が異なる。すなわち、死亡するよりは提示した負傷区分の方がマシな(望ましい)状態(BTD)と判断した回答者は、全快対死亡で成功確率を回答し(失敗すると死亡)、逆に提示した負傷区分より死亡する方がマシな(望ましい)状態(WTD)と判断した回答者は、全快対提示した負傷区分で成功確率を回答(失敗すると望ましくない負傷区分)する。

次表は、前述したランキング法の結果より、負傷区分別に死亡と提示した負傷区分のどちらがマシな(望ましい)状態か選択した比率を示している。その結果、負傷 Y から負傷 A へと負傷区分が軽減するにしたがって、死亡するよりは提示した負傷状態の方がマシ(望ましい)と考える比率が増えていることが確認できた。

表s 4-43 負傷区分別 WTA と WTD の比率(プレ調査)

負傷区分	回答者数(人)			選択比(%)	
	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)	合計	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)
負傷 Y	586	56	642	91.3	8.7
負傷 O	597	46	643	92.8	7.2
負傷 S	605	37	642	94.2	5.8
負傷 A	618	26	644	96.0	4.0
計	2,406	165	2,571	93.6	6.4

なお、平成 28 年度調査の結果と比較すると、プレアンケート調査で対象とした負傷 Y、O について、死亡するより提示した負傷区分の方がマシな(望ましい)状態とした回答の比率が大きく減少しており、プレ調査では負傷カードの内容の理解度が深まったものと推察される。

表s 4-44 (参考)平成 28 年度本調査の負傷区分別 WTA と WTD の比率

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)	合計	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)
負傷 Q	208	112	320	65.0	35.0
負傷 E	251	69	320	78.4	21.6
負傷 Y	270	50	320	84.4	15.6
負傷 O	281	39	320	87.8	12.2
合計	1,010	270	1,280	78.9	21.1

3) 非理解回答比率

交通事故により「特別な治療」を受けるための成功確率に関する設問について、非理解回答の比率は、12～14%となっており、各負傷区分で大きな差は見られない。

表s 4-45 負傷区分別有効回答と非理解回答の比較(プレ調査)

負傷区分	回答者数(人)			有効及び非理解回答比率(%)	
	有効回答	非理解回答	合計	有効回答	非理解回答
Y	564	78	642	87.9	12.1
O	564	79	643	87.7	12.3
S	558	84	642	86.9	13.1
A	554	90	644	86.0	14.0
合計	2,240	331	2,571	87.1	12.9

(2) 負傷区分別代替率の推計結果

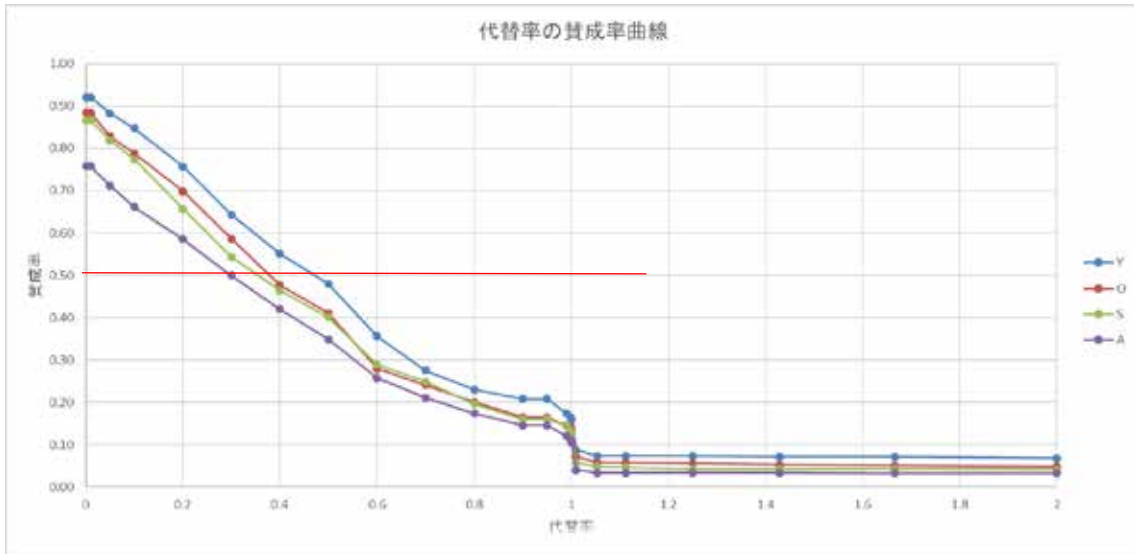
SG 法により得られた結果に基づき各負傷区分の代替率を推計した。推計のための前提条件は、以下のとおりである。

- ・ 特別な治療の成功確率の上限値・下限値の設定
 - l 「受けてもよい」成功確率を低い方から並べ、もっとも低い確率を、当該回答者の選択した成功確率 p と設定⁵⁰。
 - l 全ての成功確率で「受けたくない」を選択した場合、成功確率は 99.99%と設定(100%としない)。
 - l 全ての成功確率で「受けてもよい」を選択した場合、成功確率は 0.1%と設定。
- ・ 死亡と提示した負傷状態との比較を踏まえた代替率設定方法
 - l ランキング法により「死亡するより、提示した負傷状態がマシ(望ましい)」である場合、成功確率 $p\%$ ($0.1 \leq p \leq 99.99$)とすると、代替率は、 $(100 - p)[\%]$ とする。
 - l ランキング法により「提示した負傷状態より、死亡する方がマシ(望ましい)」である場合、成功確率 $p\%$ ($0.1 \leq p \leq 99.99$)とすると、代替率は、 $(100 \div (100 - p) \times 100)[\%]$ とする。

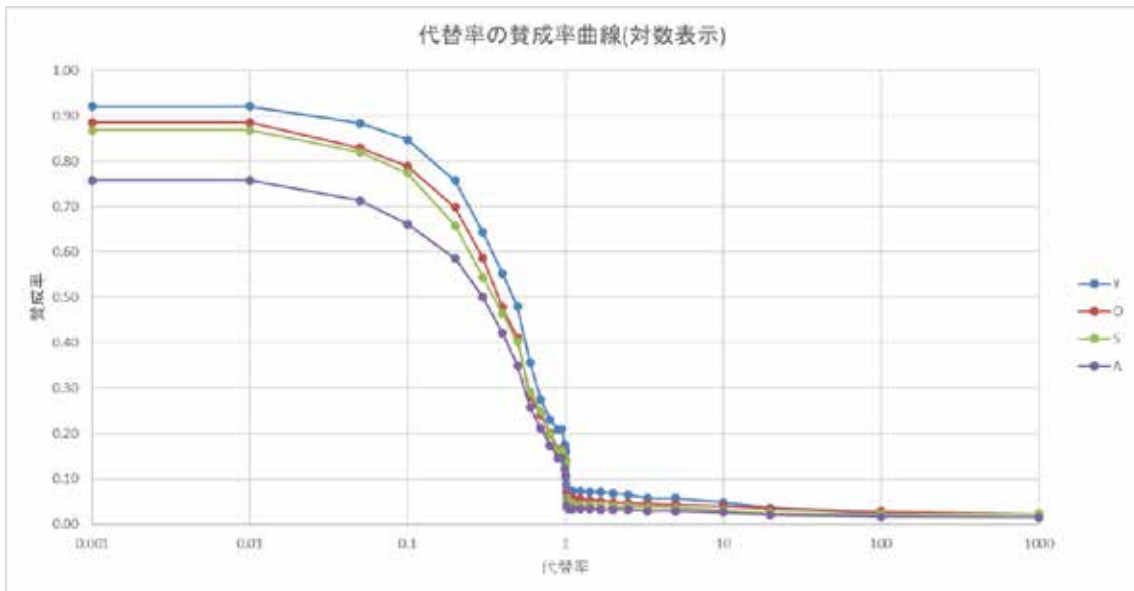
1) 代替率の賛成率曲線

負傷区分別代替率の賛成率曲線を図s 4-23 に示す。負傷 Y から A まで負傷区分が軽傷になるに従い、代替率が低くなる傾向がある。

⁵⁰ インターネットアンケートシステム上の審査論理より、論理的にありえない回答はできない仕組みのため、異常回答は存在しない(例:成功確率 10%で「受けてもよい」を選んでいるのに、成功確率 20%で「受けたくない」は選択できない)



図s 4-23 負傷区分別代替率の分布(プレ調査:全サンプル)



図s 4-24 負傷区分別代替率の分布(対数表示)(プレ調査:全サンプル)

SG 法の設問では、15 区分した成功確率値について特別な治療を受けるかの判断をしていることから、特別な治療を受けてもよいと判断した成功確率は、受けてもよいと回答した一番小さい成功確率の区分と次に小さい成功確率の区分の間にあるものと考えられる。したがって中央値についても、図s 4-23 の賛成率が 0.5(中間)と各負傷区分の賛成率曲線との交点と考えることができる。

(3) 負傷カードの解説画面読み時間

SG 法では、まず回答者に交通事故で負傷した際に受けられる「特別な治療」に関する解説を画面に表示している。この解説画面の内容は、例えば、「特別な治療」を受けて成功すれば、事故前の健康体にすぐに快復できるが、失敗すると 24 時間以内に死亡する。一方、「特別な治療」を受けない場合、一定期間の入院と退院後も後遺症が残るという状況想定を伝えている。

負傷 Y、O、S、A を対象として、その解説画面を表示してから、回答に移るまでの時間を計測した結果を下表に示す。その結果、各負傷区分ともに概ね同様の傾向がみられ、4 つの負傷区分合計では、約 95%の回答者が各負傷状態の解説画面を 1 分以内で読んでいることがわかる。平成 28 年度本調査においても同様の傾向がみられ、この原因としては、十分に解説画面に記載されている説明文を読んでいないという懸念もあるが、本設問の前に実施した負傷カードのランキングテストの際に、各負傷状態を理解した回答者が多かったことも考えられ、一概に読み飛ばしているとは断定できない。

表 s 4-46 負傷区分別解説画面読み時間分布(プレ調査)

	~1分	1~2分	2~3分	3~4分	4~5分	5~6分	6~7分	7~8分	8~9分	9~10分	10分~	計
負傷 Y	606	25	4	1	1	0	1	0	0	0	4	642
負傷 O	605	25	4	0	1	2	1	0	0	1	4	643
負傷 S	605	24	5	0	2	0	0	0	0	0	6	642
負傷 A	621	11	8	0	0	0	1	0	0	1	2	644
サンプル数(人)	2,437	85	21	1	4	2	3	0	0	2	16	2,571
比率(%)	94.8	3.3	0.8	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.1	0.6	100.0
累積比率(%)	94.8	98.1	98.9	98.9	99.1	99.2	99.3	99.3	99.3	99.4	100	100.0
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	92.5	98.2	99.0	99.2	99.5	99.5	99.5	99.7	99.7	99.7	100	100.0

	0~5秒	5~10秒	10~15秒	15~20秒	20~25秒	25~30秒	30~35秒	35~40秒	40~45秒	45~50秒	50~55秒	55~60秒	計
負傷 Y	115	148	103	71	51	38	33	18	5	10	7	7	606
負傷 O	133	140	83	67	58	45	21	19	12	13	8	6	605
負傷 S	110	136	99	67	51	32	37	32	15	10	6	10	605
負傷 A	110	146	123	87	53	35	22	18	14	4	5	4	621
サンプル数(人)	468	570	408	292	213	150	113	87	46	37	26	27	2,437
比率(%)	18.2	22.2	15.9	11.4	8.3	5.8	4.4	3.4	1.8	1.4	1.0	1.1	94.8
累積比率(%)	18.2	40.4	56.2	67.6	75.9	81.7	86.1	89.5	91.3	92.7	93.7	94.8	94.8
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	19.2	40.7	54.1	63.2	70.9	76.2	80.2	84.4	87.0	89.2	91.4	92.5	92.5

:平成 28 年度本調査の累積比率は、負傷 Q,負傷 E,負傷 Y,負傷 O の 4 つの負傷区分を対象としている。

s 4.3.4 負傷損失(確定 CV 法)に関する分析結果【負傷 A】

(1) 回答者比率

1) 性別・年齢階層別回答者数および比率

負傷 A の一人当たり負傷損失算定のための確定 CV 法の回答者の性別構成比を以下に示す。全国の傾向と比較すると、男女比率が逆転しており、男女間で偏りがみられた。年齢階層別には、50 代以下の回答者比率が年齢構成割合と比較して多く、60 代以上の回答者比率が少なくなっている。

表s 4-47 性別比率(負傷 A(確定 CV 法))

	回答者数(人)				男女比(%)		
	男性	女性	答えたくない	総計	男性	女性	答えたくない
回答者数(人)	331	309	2	642	51.6%	48.1%	0.3%
全国 ⁵¹ (千人)	61,019	64,483	-	125,502	48.6	51.4	-

表s 4-48 年齢階層別比率(負傷 A(確定 CV 法))

	回答者数(人)					
	20代	30代	40代	50代	60代以上	計
回答者数(人)	91	91	112	112	236	642
回答者比率(%)	14.2	14.2	17.4	17.4	36.8	100.0
全国(千人)	12,643	13,909	17,903	17,077	43,604	105,136
全国比(%)	12.0	13.2	17.0	16.2	41.5	100.0

2) 抵抗・非理解回答比率

負傷 A の「特別な治療」に対する支払意思額に関する設問について、抵抗・非理解回答の比率は 28.3%となっており、平成 28 年度本調査と比較して、6 ポイント程度増加した。

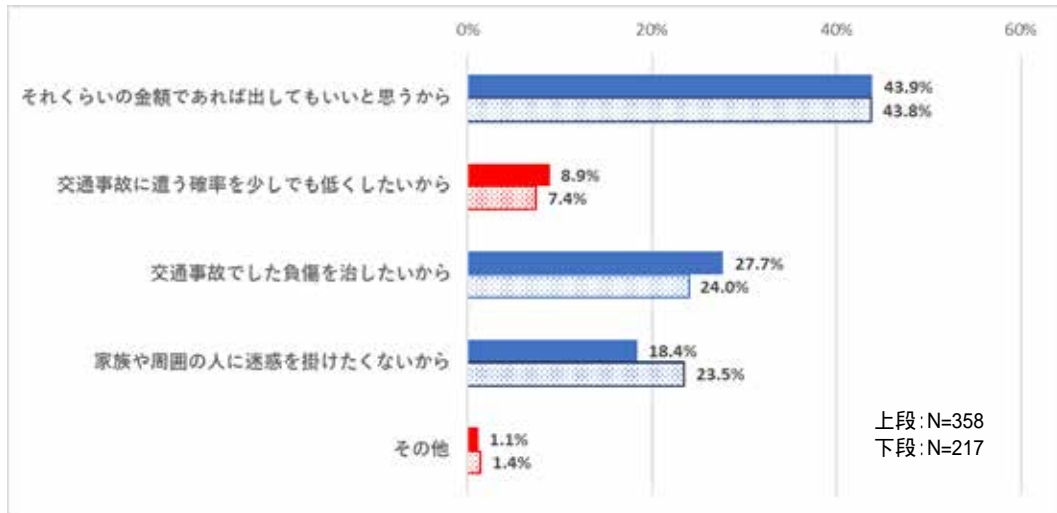
表s 4-49 負傷 A の有効回答、抵抗・非理解回答比率

負傷区分	回答者数(人)			有効対抵抗・非理解回答比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
負傷 A	460	182	642	71.7	28.3
<参考> 平成 28 調査	248	72	320	77.5	22.5

⁵¹ 令和3年 10 月 1 日現在。人数の単位は千人

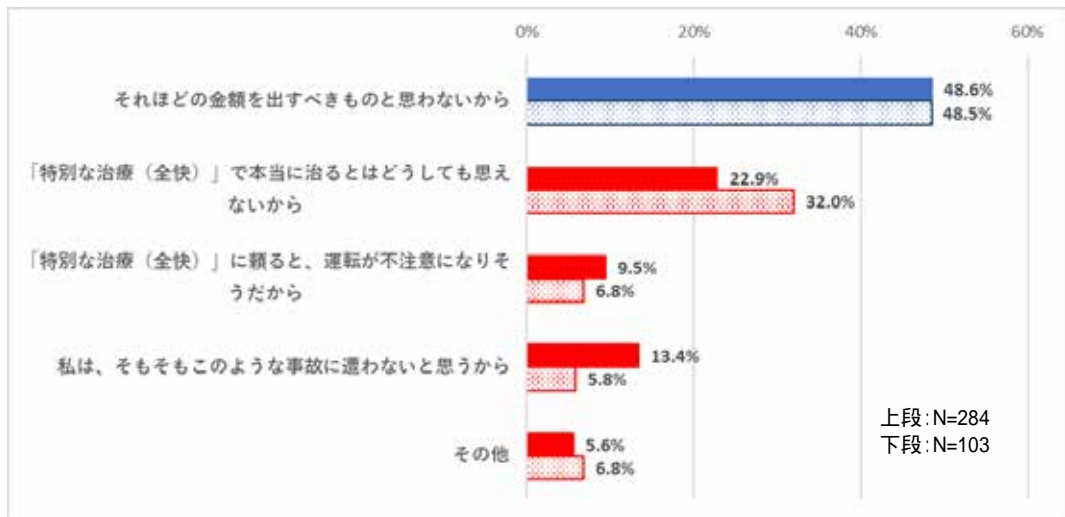
「特別な治療」に対する理解度、抵抗回答に関する設問の選択肢を個別にみていくと、支払う意思を示した回答者の理由として、非理解に該当する選択肢((交通事故に遭う確率を少しでも低くしたいから)の回答割合が、平成 28 年度調査と比較して若干増加している。

また、「特別な治療」の治療費を支払う意思のない回答者のうち抵抗回答を選択した割合のうち、「特別な治療(全快)」で本当に治るとはどうしても思えないから」が 10%程度減少したが、その他の抵抗回答の選択肢が増加している。



注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

図s 4-25 「特別な治療」(負傷 A)に支払う意思を示した理由
(上段: プレ調査、下段: H28 本調査)



注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-26 「特別な治療」(負傷 A)に支払う意思のない理由
(上段: プレ調査、下段: H28 本調査)

(2) 負傷損失(確定 CV 法)における一人当たり負傷損失(負傷 A)の試算

1) 支払意思額の推定方法

負傷 A の負傷損失の推定方法は、一人当たり死亡損失の推定方法と同様、対数ロジットモデル(ダブルバウンド)により行った。

$$\Pr[\text{Yes}] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(\text{Bid})$$

ここで、 $\Pr[\text{Yes}]$: 提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率

V : 効用レベル

Bid : 提示額[治療費](円)

a, b : パラメータ

モデルのパラメータ推定に適用したサンプルについて、『特別な治療』の治療費に関する最初の提示額と 2 回目の提示額への賛成 / 反対のパターンを YY(1 回目の提示額も 2 回目の提示額も賛成)、YN(1 回目の提示額は賛成するが 2 回目の提示額には反対)、NY(1 回目の提示額には反対したが 2 回目の提示額には賛成)、NN の 4 パターン(1 回目の提示額も 2 回目の提示額も反対)とし、金額組合せ(5 パターン)毎に、賛成 / 反対の回答者数を集計し、全サンプル 642 サンプル、有効回答サンプルは 460 サンプルとなった。

表 s 4-50 金額組合せパターン

	T1(円)	TU(円)	TL(円)
金額組合せ 1	3 万	5 万	1 万
金額組合せ 2	5 万	10 万	3 万
金額組合せ 3	50 万	100 万	30 万
金額組合せ 4	100 万	300 万	50 万
金額組合せ 5	300 万	500 万	100 万

表s 4-51 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(全サンプル)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	61	15	11	41	128
5万	10万	3万	65	14	7	43	129
50万	100万	30万	33	19	5	71	128
100万	300万	50万	27	35	12	63	137
300万	500万	100万	22	21	11	66	120
合計			208	104	46	284	642

表s 4-52 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(有効回答サンプル)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	58	11	9	16	94
5万	10万	3万	61	12	7	22	102
50万	100万	30万	33	17	5	33	88
100万	300万	50万	22	29	10	30	91
300万	500万	100万	21	16	11	37	85
合計			195	85	42	138	460

パラメータ推定の結果を下表に示す。いずれのケースにおいても、パラメータは 1%有意となった。

表s 4-53 負傷 A の支払意思額推計結果

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	5.7147	14.323	0.000***	7.3487	14.287	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.4707	-14.553	0.000***	-0.5594	-13.812	0.000***
対数尤度	-792.597			-584.208		
サンプル数	642			460		
中央値(円)	187,208			507,860		
平均値(円) ²	1,314,935			1,669,798		

1: *** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2: 平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

(3) 負傷カード A の解説画面読み時間

負傷 A(確定 CV 法)においても、SG 法と同様、「特別な治療」を受けるための前提条件等について、解説画面を読み、理解してもらうステップを用意した。

その前提条件等を表示してから、回答に移るまでの時間を計測した結果を下表に示す。30秒以内に回答した者は約66%となっており、平成28年度本調査と比較して若干多くなっているが、1分以内であれば平成28年度本調査とほぼ同程度となっている。

表s 4-54 負傷 A の解説画面読み時間分布

	～ 1分	1～2分	2～3分	3～4分	4～5分	5～6分	6～7分	7～8分	8～9分	9～10分	10分～	計
サンプル数(人)	557	73	8	0	0	1	0	0	0	0	3	642
比率(%)	86.8	11.4	1.2	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	100.0
累積比率(%)	86.8	98.1	99.4	99.4	99.4	99.5	99.5	99.5	99.5	99.5	100	100.0
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	89.1	95.3	96.9	97.5	97.8	98.4	98.4	98.4	98.4	98.4	100	100.0

	0～5秒	5～10秒	10～15秒	15～20秒	20～25秒	25～30秒	30～35秒	35～40秒	40～45秒	45～50秒	50～55秒	55～60秒	計
サンプル数(人)	32	138	88	79	45	43	39	29	23	16	13	12	557
比率	5.0	21.5	13.7	12.3	7.0	6.7	6.1	4.5	3.6	2.5	2.0	1.9	86.8
累積比率(%)	5.0	26.5	40.2	52.5	59.5	66.2	72.3	76.8	80.4	82.9	84.9	86.8	86.8
<参考>H28 本調査 累積比率(%)	0.0	0.0	14.1	31.3	48.4	59.1	67.2	74.4	76.9	82.5	85.9	89.1	89.1

s 4.4 アンケート本調査の実施

s 4.4.2 一人当たり死亡損失(確率 CV 法)に関する分析結果

(1) 回答者比率

1) 性別・年齢階層別回答者数および比率

死亡リスク削減率(20%、50%)ごとの回答者数は、ほぼ同数となり、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。また、回答者の年齢階層別構成比についても、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。

表s 4-55 死亡リスク削減率(20%、50%)別性別回答者比率

死亡リスク削減率	回答者数(人)				構成比(%)		
	男性	女性	答えたくない	総計	男性	女性	答えたくない
20%	917	1,003	8	1,928	47.6	52.0	0.4
50%	931	989	5	1,925	48.4	51.4	0.3
合計	1,848	1,992	13	3,853	48.0	51.7	0.3
全国(千人) ⁵²	61,019	64,483	-	125,502	48.6	51.4	-

表s 4-56 死亡リスク削減率(20%、50%)別年齢階層別比率

	リスク削減率	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
回答者数(人)	20%	238	277	315	299	799	1928
	50%	232	242	345	327	779	1925
	合計	470	519	660	626	1,578	3,853
比率(%)	20%	12.3	14.4	16.3	15.5	41.4	100.0
	50%	12.1	12.6	17.9	17.0	40.5	100.0
	合計	12.2	13.5	17.1	16.2	41.0	100.0
全国(千人)		12,643	13,909	17,903	17,077	43,604	105,136
全国比率(%)		12.0	13.2	17.0	16.2	41.5	100.0

2) 抵抗・非理解回答比率

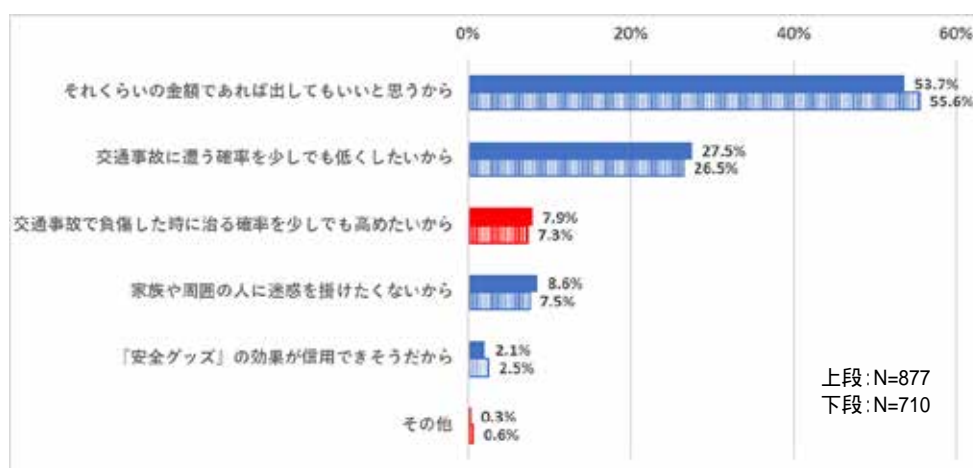
『安全グッズ』に対する理解度、抵抗回答に関する設問の選択肢を個別にみていくと、支払う意思を示した回答者の理由として、非理解に該当する選択肢(交通事故で負傷した時に治る確率を少しでも高めたいから)の割合は、死亡リスク削減率20%のケースではわずかにプレ調査を上回るが、死亡リスク削減率50%のケースでは2ポイント改善している。

⁵² 令和3年10月1日現在。人数の単位は千人。以下同様。

また、『安全グッズ』の使用料を支払う意思のない回答者のうち抵抗回答を選択した割合は、プレ調査結果と概ね同様の比率となっているが、「『安全グッズ』を持つことで、かえって運転が不注意になりそうだから」の選択肢が、死亡リスク削減率 20%と 50%の両ケースで微増している。

表 s 4-57 死亡リスク削減率別有効及び抵抗・非理解回答率(本調査)

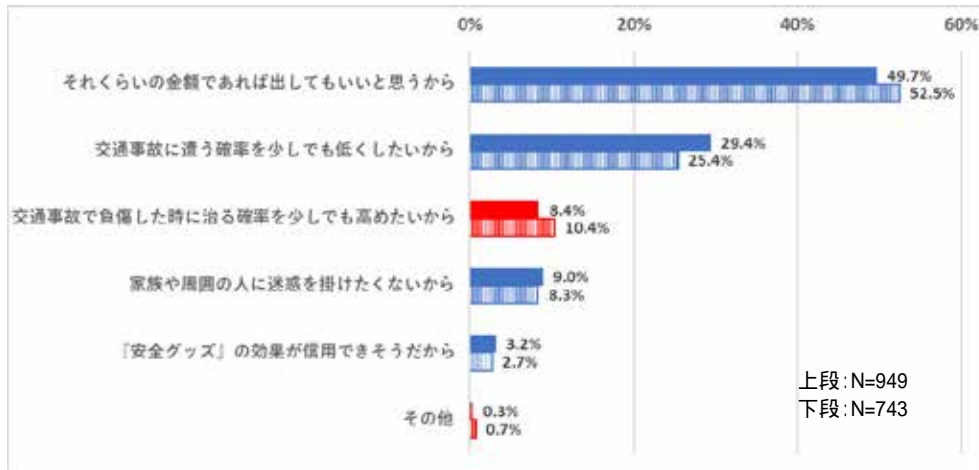
死亡リスク削減率		回答者数(人)			有効及び抵抗・非理解回答比率(%)	
		有効回答	抵抗・非理解回答	合計	有効回答	抵抗・非理解回答
本調査	20%	1,182	746	1,928	61.3	38.7
	50%	1,208	717	1,925	62.8	37.2
	合計	2,390	1,463	3,853	62.0	38.0
【参考】 プレ調査	20%	969	638	1,607	60.3	39.7
	50%	966	640	1,606	60.1	39.9
	合計	1,935	1,278	3,213	60.2	39.8
【参考】 H28 本調査	50%	1,489	751	2,240	66.5	33.5



注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

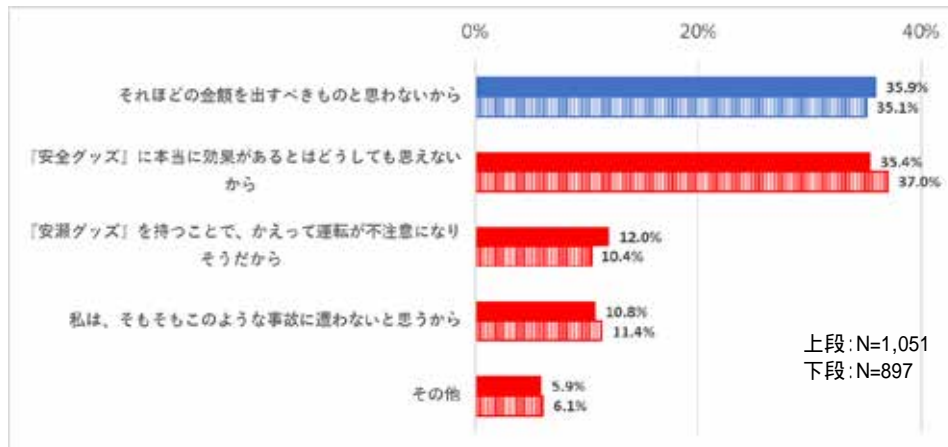
図 s 4-27 『安全グッズ』の使用料を支払う意思を示した理由(リスク削減率 20%)

(上段: 本調査、下段: プレ調査)



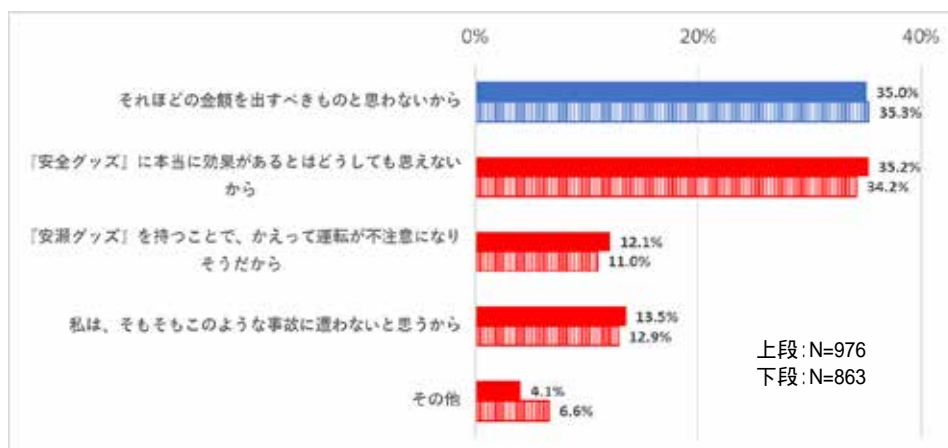
注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

図s 4-28 『安全グッズ』の使用料を支払う意思を示した理由(リスク削減率 50%)
(上段: 本調査、下段: プレ調査)



注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-29 『安全グッズ』の使用料を支払う意思のない理由(リスク削減率 20%)
(上段: 本調査、下段: プレ調査)



注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-30 『安全グッズ』の使用料を支払う意思のない理由(リスク削減率 50%)
(上段: 本調査、下段: プレ調査)

(2) 死亡損失(確率 CV 法)における一人当たり死亡損失の試算

1) 支払意思額の推定方法

微小な死亡リスク削減による支払意思額及び一人当たり死亡損失の推定方法は、プレ調査と同様、対数ロジットモデル(ダブルバウンド)により行った。

$$\Pr[\text{Yes}] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(\text{Bid})$$

ここで、 $\Pr[\text{Yes}]$: 提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率

V : 効用レベル

Bid : 提示額【使用料】(円)

a, b : パラメータ

死亡リスク削減率 20%のケースでは、全サンプル 1,928 サンプル、有効回答サンプルは 1,182 サンプル、死亡リスク削減率 50%のケースでは、全サンプル 1,925 サンプル、有効回答サンプルは 1,208 サンプルとなった。

表s 4-58 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(全サンプル: 死亡リスク削減率 20%) (本調査)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	89	92	117	89	387
5,000	10,000	1,000	64	69	105	147	385
10,000	30,000	5,000	32	71	45	238	386
30,000	50,000	10,000	29	31	52	272	384
50,000	100,000	30,000	27	37	17	305	386
合計			241	300	336	1051	1,928

表s 4-59 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(有効回答サンプル: 死亡リスク削減率 20%) (本調査)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	81	85	111	32	309
5,000	10,000	1,000	60	61	100	45	266
10,000	30,000	5,000	27	65	42	78	212
30,000	50,000	10,000	27	27	49	97	200
50,000	100,000	30,000	20	33	17	125	195
合計			215	271	319	377	1,182

表s 4-60 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(全サンプル:死亡リスク削減率 50%) (本調査)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	96	93	97	100	386
5,000	10,000	1,000	77	92	90	126	385
10,000	30,000	5,000	43	74	36	231	384
30,000	50,000	10,000	43	58	51	232	384
50,000	100,000	30,000	25	60	14	287	386
合計			284	377	288	976	1,925

表s 4-61 提示金額別賛成 / 反対サンプル数
(有効回答サンプル:死亡リスク削減率 50%) (本調査)

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	計
1,000	5,000	100	87	90	94	30	301
5,000	10,000	1,000	70	84	88	34	276
10,000	30,000	5,000	36	65	32	75	208
30,000	50,000	10,000	38	51	47	82	218
50,000	100,000	30,000	24	48	12	121	205
合計			255	338	273	342	1,208

パラメータ推定の結果を下表に示す。

表s 4-62 ロジットモデルパラメータ及び推定結果(死亡リスク削減率 20%) (本調査)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値	係数	t 値	p 値 ²
定数項	4.9019	27.982	0.000***	6.5888	27.484	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.6589	-31.182	0.000***	-0.7874	-28.470	0.000***
対数尤度	-2170.872			-1614.739		
サンプル数	1928			1,182		
中央値(円)	1,702			4,306		
平均値(円) ¹	13,420			17,850		

1:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2:平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

表s 4-63 ロジットモデルパラメータ及び推定結果(死亡リスク削減率 50%) (本調査)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	4.8045	28.984	0.000***	6.8261	28.543	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.6210	-31.300	0.000***	-0.7846	-29.092	0.000***
対数尤度	-2373.036			-1723.800		
サンプル数	1925			1,208		
中央値(円)	2,291			6,006		
平均値(円) ²	16,750			21,503		

1:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2:平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

2) 一人当たり死亡損失の算定における死亡リスク削減率の有意差の推定方法

プレ調査と同様、本調査においても回答者は死亡リスク削減率 20%または 50%のいずれか一方のみを尋ねているが、両者の有意差を以下のモデルで検証した。対象サンプルは、抵抗・非理解回答を除去した有効回答のみを適用した。

$$\Pr[\text{Yes}] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(Bid) + c \cdot Risk$$

パラメータ推定結果を表s 4-64 に示す。 $Risk$ にかかるダミー変数の符号条件が正であり、1%有意水準で有意となっている。プレ調査が 10%有意水準で有意であったことを踏まえると、本調査で推定された死亡リスク削減率 20%と 50%の支払意思額は、より有意な差が確認できた。

表s 4-64 死亡リスク削減率の違いによる有意差検証モデルのパラメータ推定結果(本調査)

	有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値
定数項	6.5764	38.246	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.7860	-40.705	0.000***
$Risk$	0.2622	3.401	0.001***
対数尤度	-3338.5413		
サンプル数	2,390		

:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

s 4.4.3 ランキング法の分析結果

また、負傷区分の中で最も重度の負傷である負傷 Q は、回答者の 13.4%（プレ調査：11.8%）が最も低い順位をつけていたが、それ以外の負傷区分は、プレ調査と同様、2%強以下となっている。

表s 4-65 負傷区分別順位別回答比率(本調査)

順位	K(死亡)	負傷 Q	負傷 E	負傷 Y	負傷 O	負傷 S	負傷 A	J(健康)
1	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
2	3.9%	4.7%	2.2%	1.6%	1.6%	5.7%	80.2%	0.0%
3	1.7%	5.4%	5.5%	3.0%	3.3%	75.8%	5.5%	0.0%
4	1.7%	2.4%	7.0%	8.1%	71.1%	6.5%	3.1%	0.0%
5	2.2%	2.9%	4.6%	74.3%	9.9%	3.7%	2.5%	0.0%
6	5.8%	4.5%	68.8%	8.5%	5.7%	4.1%	2.7%	0.0%
7	5.8%	66.7%	11.0%	3.0%	5.9%	3.9%	3.6%	0.0%
8	78.8%	13.4%	1.0%	1.5%	2.5%	0.4%	2.4%	0.0%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

また、SG 法で回答した負傷区分別に死亡より望ましくない状態（WTD）の回答者比率は、負傷 Q が 18.4%（プレ調査：16.4%）と最も多く、プレ調査と同様、負傷の程度が低くなるほどその比率は小さくなる。

表s 4-66 負傷区分別死亡より望ましくないと回答した者の比率(本調査)

		負傷 Q	負傷 E	負傷 Y	負傷 O	負傷 S	負傷 A
本調査	件数	708	546	373	341	241	211
	比率	18.4%	14.2%	9.7%	8.9%	6.3%	5.5%
<参考> プレ調査	件数	526	403	294	255	189	162
	比率	16.4%	12.5%	9.2%	7.9%	5.9%	5.0%

また、7 枚の負傷カードをランキングする時間を測定したが、1 分以内が全回答者の 40.1%（プレ調査：41.2%）、2 分以内が 78.2%（プレ調査：76.2%）と概ねプレ調査と同様の傾向となった。

表s 4-67 7 枚の負傷カードのランキングにかかった所要時間分布(本調査)

	~1分	1~2分	2~3分	3~4分	4~5分	5~6分	6~7分	7~8分	8~9分	9~10分	10分~	計
サンプル数(人)	1,544	1,469	425	173	57	30	21	14	7	7	106	3,853
比率(%)	40.1	38.1	11.0	4.5	1.5	0.8	0.5	0.4	0.2	0.2	2.8	100.0
累積比率(%)	40.1	78.2	89.2	93.7	95.2	96.0	96.5	96.9	97.1	97.2	100.0	100.0
<参考>プレ調査(%)	41.2	76.2	88.5	92.5	95.0	95.8	96.4	96.8	97.1	97.2	100.0	100.0

s 4.4.4 負傷損失 (SG 法) に関する分析結果【負傷 Q,E,Y,O】

(1) 回答者比率

1) 負傷区分別性別年齢階層別回答者数及び比率

負傷区分別性別の回答者数を以下に示す。いずれの負傷区分においても同程度のサンプルが得られており、男女比率についても、全国の男女比率とほぼ同程度となっている。

表s 4-68 負傷区分別性別回答者数及び構成比(本調査)

負傷区分	回答者数(人)				構成比(%)		
	男性	女性	答えたくない	合計	男性	女性	答えたくない
負傷 Q	313	327	3	643	48.7	50.9	0.5
負傷 E	307	333	1	641	47.9	52.0	0.2
負傷 Y	319	321	2	642	49.7	52.0	0.3
負傷 O	291	349	4	644	45.2	54.2	0.6
合計	1,230	1,330	10	2,570	47.9	51.8	0.4
全国(千人)	61,019	64,483	-	125,502	48.6	51.4	-

出所) 全国の人口は、「令和3年10月1日現在人口推計」総務省統計局

表s 4-69 負傷区分別年齢階層別回答者数および構成比(本調査)

	負傷区分	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
回答者数(人)	負傷 Q	79	78	139	101	246	643
	負傷 E	77	86	111	100	267	641
	負傷 Y	82	86	102	100	272	642
	負傷 O	83	82	99	121	259	644
	合計	321	332	451	422	1,044	2,570
構成比(%)	負傷 Q	12.3	12.1	21.6	15.7	38.3	100.0
	負傷 E	12.0	13.4	17.3	15.6	41.7	100.0
	負傷 Y	12.8	13.4	15.9	15.6	42.4	100.0
	負傷 O	12.9	12.7	15.4	18.8	40.2	100.0
	合計	12.5	12.9	17.5	16.4	40.6	100.0
全国(千人)		12,643	13,909	17,903	17,077	43,604	105,136
全国比率(%)		12.0	13.2	17.0	16.2	41.5	100.0

: 構成比、全国比率は、四捨五入しているため、合計の 100.0%と合わないことがある。

出所) 全国の人口は、「令和3年10月1日現在人口推計」総務省統計局

2) 負傷区分別にみた死亡よりも望ましくない(WTD)と回答した者の割合

負傷区分別に死亡と提示した負傷区分のどちらがマシな(望ましい)状態が選択した比率については、負傷、後遺障害の程度が軽減するに従い、死亡するよりは提示した負傷状態の方がマシ(望ましい)な状態(WTA)と考える比率が増えていることが確認できた。

表s 4-70 負傷区分別 WTA と WTD の比率(本調査)

負傷区分	回答者数(人)			選択比(%)	
	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)	合計	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)
負傷 Q	500	143	643	77.8	22.2
負傷 E	573	68	641	89.4	10.6
負傷 Y	581	61	642	90.5	9.5
負傷 O	597	47	644	92.7	7.3
計	2,251	319	2,570	87.6	12.4

なお、平成 28 年度調査の結果と比較すると、死亡するより提示した負傷区分の方がマシな(望ましい)状態(WTA)とした回答の比率が大きく減少しており、負傷カードの内容の理解度が深まった状態で SG 法の設問に回答した方が多くなったものと推察される。

表s 4-71 (参考)平成 28 年度本調査の負傷区分別 WTA と WTD の比率(再掲)

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)	合計	WTA (負傷の方がマシ)	WTD (死亡した方がマシ)
負傷 Q	208	112	320	65.0	35.0
負傷 E	251	69	320	78.4	21.6
負傷 Y	270	50	320	84.4	15.6
負傷 O	281	39	320	87.8	12.2
合計	1,010	270	1,280	78.9	21.1

3) 非理解回答比率

交通事故により「特別な治療」を受けるための成功確率に関する設問について、非理解回答の割合は、12～15%となっており、負傷 O と負傷 Q に対して、負傷 Y と負傷 O が若干高くなっている。なお、負傷 Y と負傷 O について、プレ調査と比較も非理解回答の比率が高くなっている。

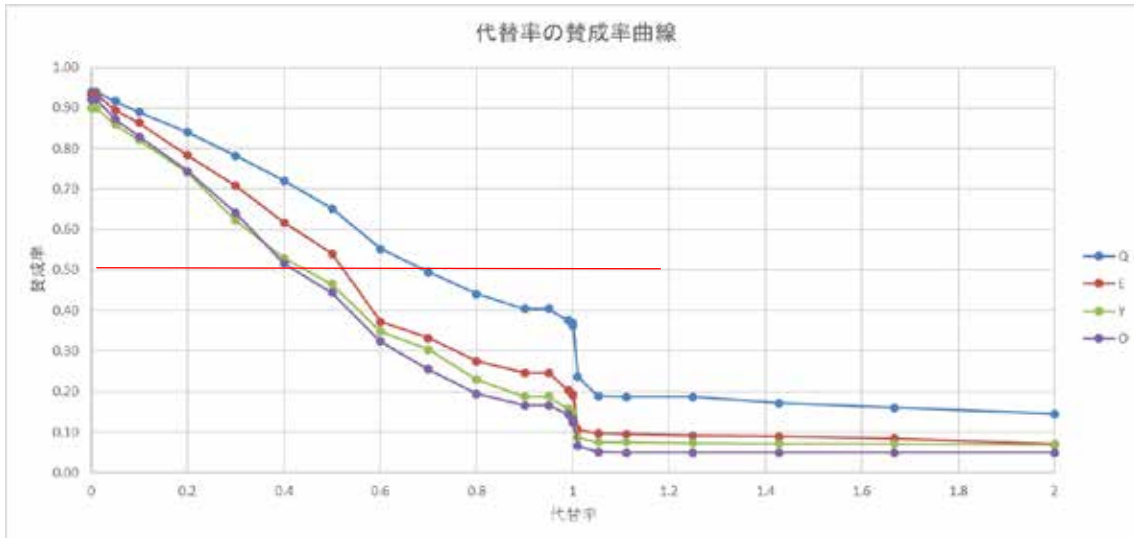
表s 4-72 負傷区分別有効回答と非理解回答の比較(本調査)

	負傷区分	回答者数(人)			有効及び非理解回答比率(%)	
		有効回答	非理解回答	合計	有効回答	非理解回答
本調査	負傷Q	562	81	643	87.4	12.6
	負傷E	561	80	641	87.5	12.5
	負傷Y	548	94	642	85.4	14.6
	負傷O	557	87	644	86.5	13.5
	合計	2,228	342	2,570	86.7	13.3
プレ調査	負傷Y	564	78	642	87.9	12.1
	負傷O	564	79	643	87.7	12.3

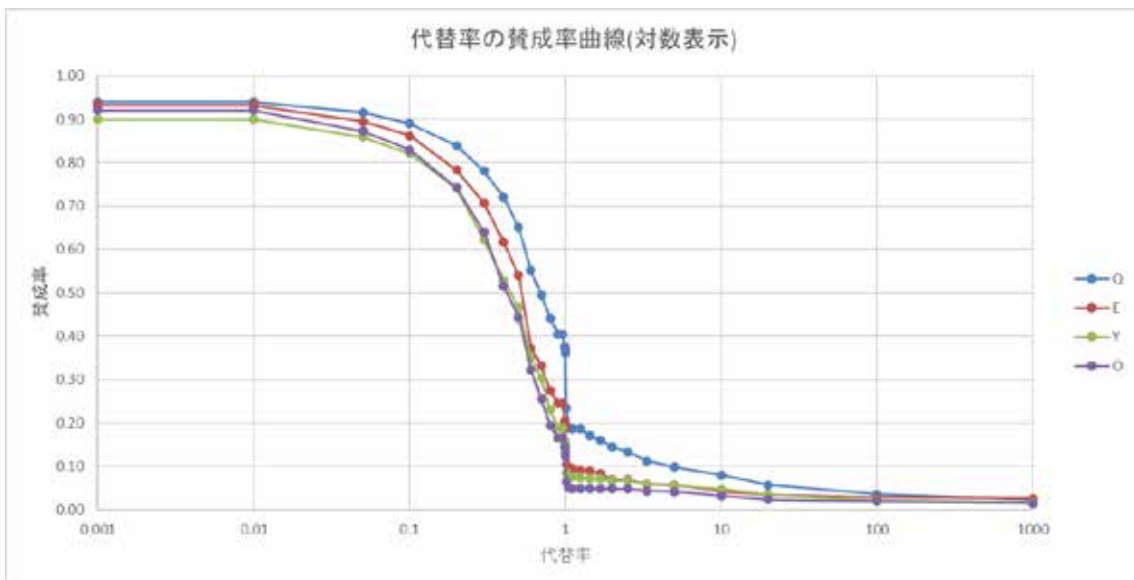
(2) 負傷区分別代替率の推計結果

1) 代替率の賛成率曲線

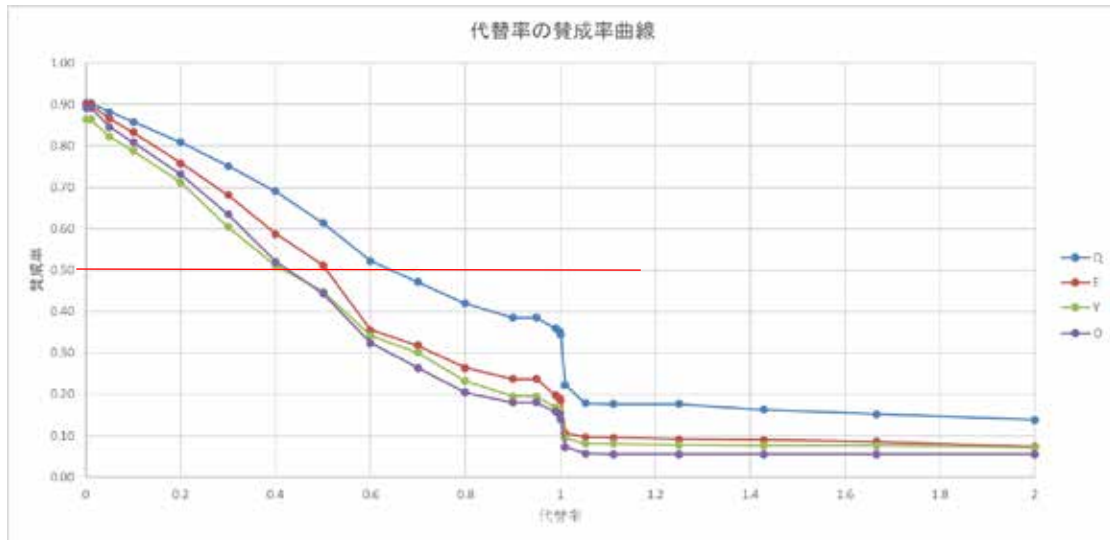
負傷区分別代替率の賛成率曲線を図s 4-31～図s 4-34 に示す。プレ調査含めて既存調査同様、負傷 Q から O まで負傷区分が軽傷になるに従い、代替率が低くなる傾向がある。ただし、全サンプルにおいては、負傷 O の代替率が、より重傷である負傷 Y の代替率より高くなっている。



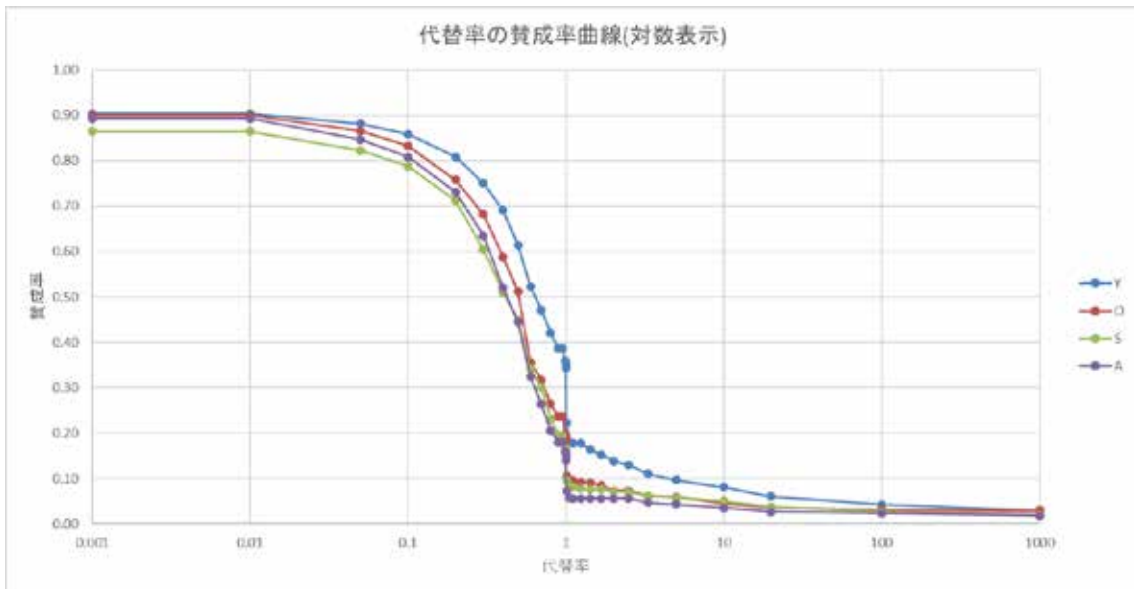
図s 4-31 負傷区分別代替率の分布(本調査:有効回答サンプル)



図s 4-32 負傷区分別代替率の分布(対数表示)(本調査:有効回答サンプル)



図s 4-33 負傷区分別代替率の分布(本調査:全サンプル)



図s 4-34 負傷区分別代替率の分布(対数表示)(本調査:全サンプル)

(3) 負傷カードの解説画面読み時間

負傷 Q、E、Y、O を対象として、その解説画面を表示してから、回答に移るまでの時間を計測した結果を下表に示す。その結果、ほとんどの回答者が1分以内で解説画面を読みんでおり、各負傷区分は異なるものの、プレ調査や平成28年度本調査と同様の水準となっている。

表s 4-73 負傷区分別解説画面読み時間分布(本調査)

	~ 1分	1~2分	2~3分	3~4分	4~5分	5~6分	6~7分	7~8分	8~9分	9~10分	10分~	計
負傷 Q	627	9	0	1	0	1	1	0	0	0	4	643
負傷 E	612	18	1	4	1	1	0	0	0	0	4	641
負傷 Y	617	17	2	0	1	0	0	1	0	1	3	642
負傷 O	606	22	4	1	1	0	0	3	0	0	7	644
サンプル数(人)	2,462	66	7	6	3	2	1	4	0	1	18	2,570
比率(%)	95.8	2.6	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.04	0.7	100.0
累積比率(%)	95.8	98.4	98.6	98.9	99.0	99.1	99.1	99.3	99.3	99.3	100	100.0
<参考>プレ調査 累積比率(%) ¹	94.8	98.1	98.9	98.9	99.1	99.2	99.3	99.3	99.3	99.4	100	100.0
<参考>H28本調査 累積比率(%) ²	92.5	98.2	99.0	99.2	99.5	99.5	99.5	99.7	99.7	99.7	100	100.0

	0~5秒	5~10秒	10~15秒	15~20秒	20~25秒	25~30秒	30~35秒	35~40秒	40~45秒	45~50秒	50~55秒	55~60秒	計
負傷 Q	117	158	115	80	63	38	26	9	10	5	3	3	627
負傷 E	121	134	101	69	61	37	27	23	19	8	7	5	612
負傷 Y	130	160	93	74	41	30	26	27	8	16	8	4	617
負傷 O	117	158	95	70	46	34	25	28	15	7	3	8	606
サンプル数(人)	485	610	404	293	211	139	104	87	52	36	21	20	2,462
比率(%)	18.9	23.7	15.7	11.4	8.2	5.4	4.0	3.4	2.0	1.4	0.8	0.8	95.8
累積比率(%)	18.9	42.6	58.3	69.7	77.9	83.3	87.4	90.8	92.8	94.2	95.0	95.8	95.8
<参考>プレ調査 ¹ 累積比率(%) ¹	18.2	40.4	56.2	67.6	75.9	81.7	86.1	89.5	91.3	92.7	93.7	94.8	94.8
<参考>H28本調査 累積比率(%) ²	19.2	40.7	54.1	63.2	70.9	76.2	80.2	84.4	87.0	89.2	91.4	92.5	92.5

1: プレ調査の累積比率は、負傷 Y、負傷 O、負傷 S、負傷 A の4つの負傷区分を対象としている。

2: 平成28年度本調査の累積比率は、今年度調査同様、負傷 Q、負傷 E、負傷 Y、負傷 O の4つの負傷区分を対象としている。

s 4.4.5 負傷損失(確定 CV 法)に関する分析結果【負傷 S,A】

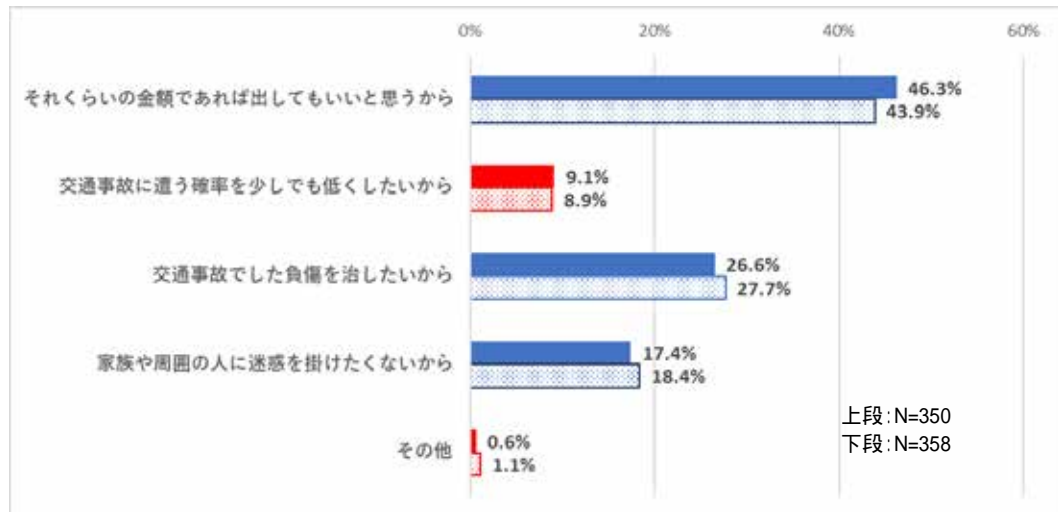
(1) 回答者比率

2) 抵抗・非理解回答比率

負傷 A について、「特別な治療」に対する理解度、抵抗回答に関する設問の選択肢を個別にみていくと、支払う意思を示した回答者の理由として、非理解に該当する選択肢((交通事故に遭う確率を少しでも低くしたいから)の回答割合はプレ調査とほぼ変化がなく、有効

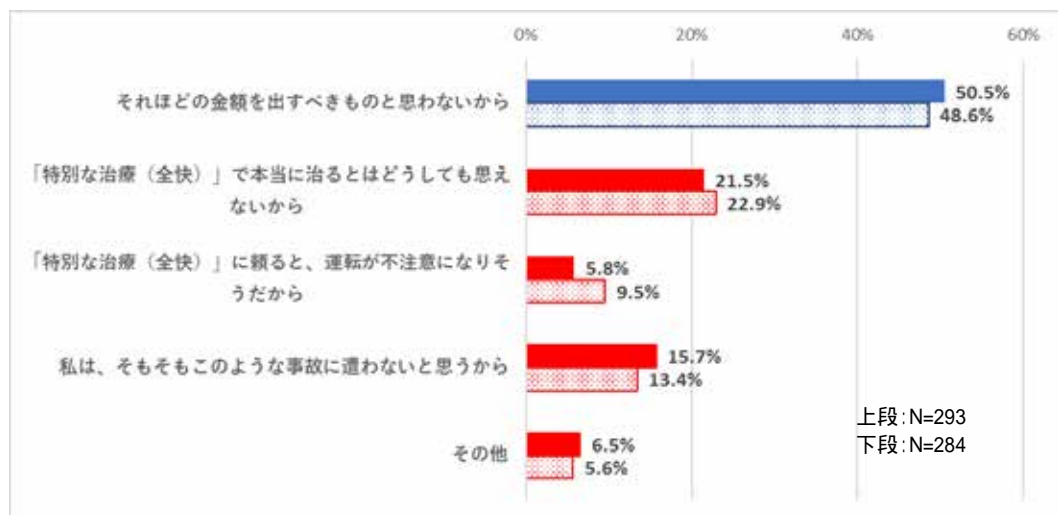
回答の選択肢回答割合は増加しているものと減少しているものがある。

また、「特別な治療」の治療費を支払う意思のない理由として、有効回答(それほどの金額を出すべきものと思わないから)の回答者比率は増加し、抵抗回答を選択した回答者のうち、特に「特別な治療(全快)」に頼ると、運転が不注意になりそうだから」が 3.7 ポイント減少している。



注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

図s 4-35 「特別な治療」に支払う意思を示した理由(負傷 A)
(上段: 本調査、下段: プレ調査)

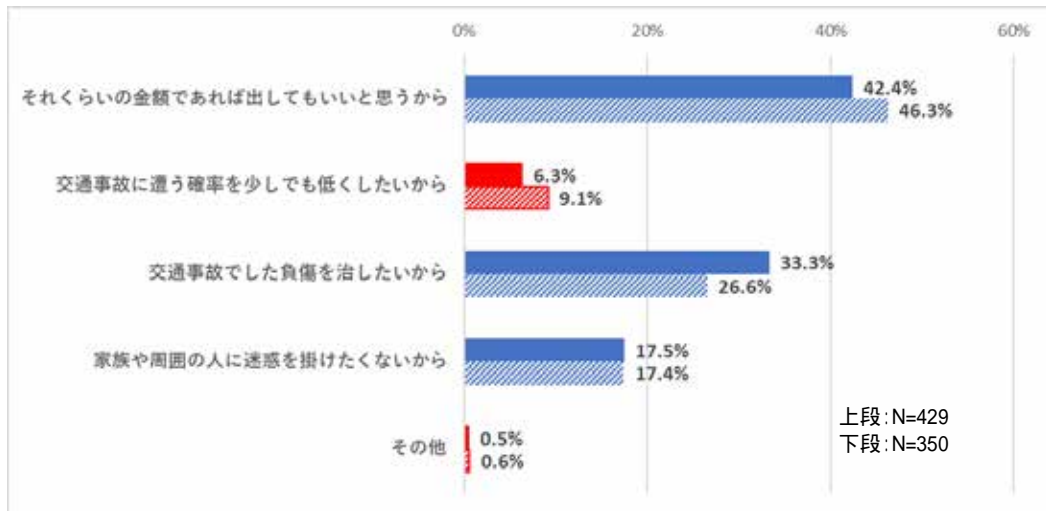


注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-36 「特別な治療」に支払う意思のない理由(負傷 A)
(上段: 本調査、下段: プレ調査)

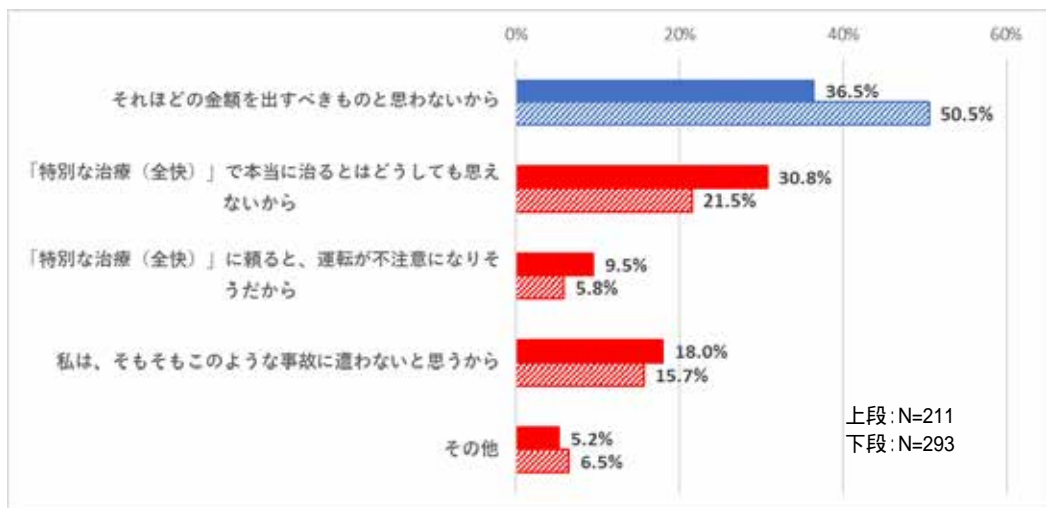
同様に、負傷 S について概観すると、支払う意思を示した回答者の理由として、非理解に該当する選択肢(交通事故に遭う確率を少しでも低くしたいから)の回答割合は負傷 A よりも小さく 6.3%となっているなど全体的に理解度が高くなっている。

また、「特別な治療」の治療費を支払う意思のない理由として、有効回答(それほどの金額を出すべきものと思わないから)の回答者比率は 36.5%であるが、負傷 A と比較して 14 ポイント程度少なくなっており、その少ない分が抵抗回答の回答者比率が全体的に高くなっている。



注: 有効回答選択肢: 青、非理解回答選択肢: 赤

図s 4-37 「特別な治療」に支払う意思を示した理由(負傷 S、A)
(上段: 負傷 S、下段: 負傷 A)



注: 有効回答選択肢: 青、抵抗回答選択肢: 赤

図s 4-38 「特別な治療」に支払う意思のない理由(負傷 S、A)
(上段: 負傷 S、下段: 負傷 A)

(2) 一人当たり負傷損失(負傷 S、A)の試算

1) 支払意思額の推定方法

負傷 S、A の負傷損失の推計は、プレ調査同様、対数ロジットモデル(ダブルバウンド)により行った。

$$\Pr[\text{Yes}] = \frac{1}{1 + e^{-\Delta V}}$$

$$\Delta V = a + b \cdot \ln(\text{Bid})$$

ここで、 $\Pr[\text{Yes}]$: 提示額に対して「はい(賛成)」と回答する確率

V : 効用レベル

Bid : 提示額[治療費](円)

a, b : パラメータ

モデルのパラメータ推定に適用したサンプルについては下表のとおり、負傷 S では全サンプル 640 サンプル、有効回答サンプルは 477 サンプル、負傷 A では全サンプル 643 サンプル、有効回答サンプルは 464 サンプルとなった。

表 s 4-74 金額組合せパターン(再掲)

	T1(円)	TU(円)	TL(円)
金額組合せ 1	3 万	5 万	1 万
金額組合せ 2	5 万	10 万	3 万
金額組合せ 3	50 万	100 万	30 万
金額組合せ 4	100 万	300 万	50 万
金額組合せ 5	300 万	500 万	100 万

表s 4-75 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(全サンプル)(本調査:負傷 S)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	89	8	5	26	128
5万	10万	3万	77	12	4	35	128
50万	100万	30万	50	23	6	49	128
100万	300万	50万	37	29	7	55	128
300万	500万	100万	30	37	15	46	128
合計			283	109	37	211	640

表s 4-76 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(有効回答サンプル)(本調査:負傷 S)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	87	4	5	8	104
5万	10万	3万	75	10	4	11	100
50万	100万	30万	45	19	5	17	86
100万	300万	50万	35	27	7	23	92
300万	500万	100万	28	34	15	18	95
合計			270	94	36	77	477

表s 4-77 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(全サンプル)(本調査:負傷 A)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	72	12	14	32	130
5万	10万	3万	51	22	9	46	128
50万	100万	30万	43	14	6	66	129
100万	300万	50万	25	16	7	80	128
300万	500万	100万	26	16	17	69	128
合計			217	80	53	293	643

表s 4-78 提示金額別賛成 / 反対サンプル数(有効回答サンプル)(本調査:負傷A)

T1(円)	TU(円)	TL(円)	YY	YN	NY	NN	計
3万	5万	1万	69	11	13	12	105
5万	10万	3万	48	20	7	17	92
50万	100万	30万	39	11	5	35	90
100万	300万	50万	24	14	6	46	90
300万	500万	100万	24	12	13	38	87
合計			204	68	44	148	464

パラメータ推定の結果を下表に示す。すべてのケースおよび変数について、パラメータは1%有意となった。

表s 4-79 負傷Sの支払意思額推計結果(本調査)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	6.6012	16.059	0.000***	9.8055	16.802	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.4959	-15.246	0.000***	-0.6852	-15.510	0.000***
対数尤度	-775.288			-538.873		
サンプル数	640			477		
中央値(円)	604,723			1,639,355		
平均値(円) ²	1,846,948			2,372,173		

1:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2:平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

表s 4-80 負傷Aの支払意思額推計結果(本調査)

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	5.5571	13.519	0.000***	6.9563	12.502	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.4623	-14.175	0.000***	-0.5352	-12.545	0.000***
対数尤度	-755.397			-560.213		
サンプル数	643			464		
中央値(円)	166,164			441,138		
平均値(円) ²	1,281,499			1,622,850		

1:*** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2:平均値は最大提示額(10万円)で裾きり